

41488

教科書文庫

4
810
41-1929
20000 82064

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

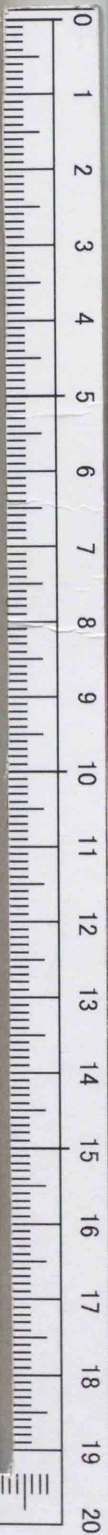


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



4a
810
昭5

國語讀本

改訂版

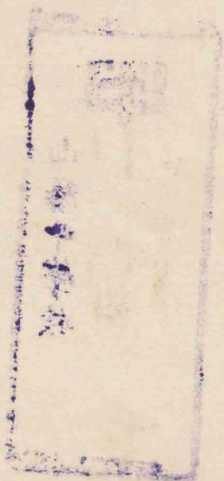
卷五

資料室

日五廿月三年四和昭
濟定檢省部文
甲科語國校學中

國語讀本 卷五

昭和改訂版



文學博士

上田萬年
榮田猛猪
鹽野新次郎
編共



42
810
AB5

山陽中學校
甲田王巳

國語讀本 卷五

目次

前篇

一 道程を愛する心

鶴見祐輔 一

二 吉野山

藤岡作太郎 八

三 行宮の秋霧

北畠親房 三

四 麥(詩)

千家元麿 二

五 太刀取

(義經記) 二五

源九郎義經

中村孝也 三

六 槍中村

菊池寛 三

七 春より夏へ (俳句)	幸田露伴 三
八 涼み臺	菊池幽芳 四
九 金ヶ崎懷古	高濱虚子 五
一〇 佛法僧	上田秋成 六
一一 雨月物語	大谷光瑞 七
一二 是是非非	佐々木指月 八
一三 上高地	吉田絃二郎 九
一四 登臨賦 (詩)	島崎藤村 一〇
一五 キヤムピング	茂木慎雄 一

一六 文學の遊戲	尾崎紅葉 二
一七 蜀山 <small>さか</small> 一九	藤村 作 三
一八 姉崎嘲風に寄する書	本山萩舟 四
一九 伊藤公を弔す	高山樗牛 五
二〇 誄詞	井上馨 六
二一 漢字の構成	芥川龍之介 七
二二 澄江堂隨筆	(保元物語) 八
二三 白河殿の軍議	五十嵐力 九
二四 文の味はひ	

三 ふるさこ (和歌)

石川啄木 二五

後篇

駿臺雑話抄

一

駿臺雑話に就いて (参考)

一

一 愚公が山

三

二 老僧が接木

五

三 天徳寺琵琶を聴く

七

四 月は世々の形見

一〇

五 進學

一五

六 壬子試筆

一八

太平記抄

二

太平記に就いて (参考)

萩野由之 二

一 落花の雪

二四

二 笠置山

三〇

三 赤坂の奇計

三三

四 備後三郎高德

三六

五 櫻井の訣別

三九

六 正成兄弟討死

四三

七 梅檀は二葉より

四六

八 主上崩御

五〇



— 原 鹽 —

目次

九 正行參内

六

五

國語讀本 卷五

前篇

一 道程を愛する心

鶴見祐輔

鶴見祐輔
群馬縣の人、
思想家、政治
家。

新町
群馬縣多野郡
新町。



鶴見祐輔

四月の麥畑に蝶が舞出すと、私は釣竿を肩にかついで、夢
のやうな楽しみにぞくぞくし
ながら、近處の沼へ鮒釣に出掛
けたものである。それは私の
十歳頃のここで、私の家が上州
の南はづれの新町にあつた時

一 道程を愛する心

一

分である。

風のない静かな日を、麗かな日影を一杯にうけながら、私は青い水の上に、ぼつとり浮いてゐる浮子を一心に眺めてゐたのだ。折々びく／＼と浮子が浮く。「今食べてゐるな。」さう思つて、顔のほてるやうな悦びを感じた。と浮子がまただらり／＼横に寝てしまふ。「やめたな。」さう思ひながら、でも一分も油断せずに浮子を見つめてゐる。

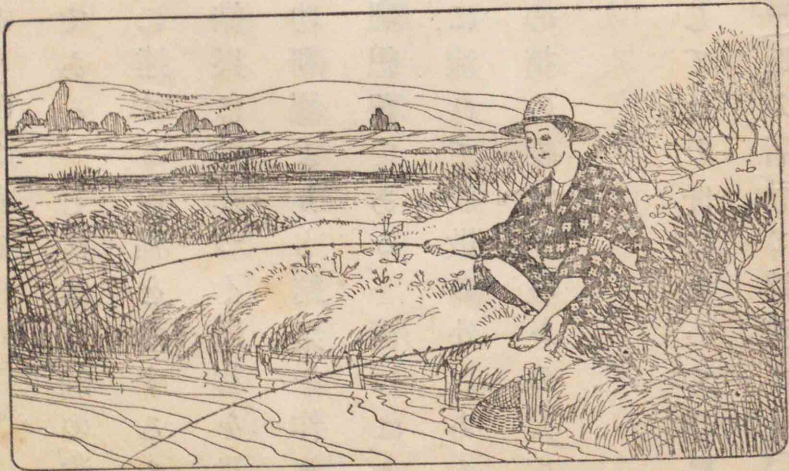
その浮子を眺めてゐた私の心の中には、必ずしも大きい鮒を釣上げようといふ功名心だけが躍つてゐたのではない。春の野邊のよい空気を吸つて、身體を健康にしようなどといふ、手輕な功利觀念はもとより毫末もなかつた。た

功名心
功利觀念

忘我
無我

だ少年の私は、浮子の浮き沈みを見てゐるのが嬉しかつたのである。その無心な忘我の心持を貴きものとして、私は想ひ起すのである。

年をこつて後も、我々は折々かゝる心境にさまよひ込むことがある。それは山路などを一人歩み行く折である。目的地に早く着かうといふ囚はれた心持ではない。ぼんやりと



執着
執念

周囲の自然に魅せられて歩んでゐるのである。それは二つながら共通の心持である。それは目的の達成に執着する心でなくして、目的に達する道程を愛する心である。事業の結果よりも、その結果に辿りつく道程を貴しとする心である。結果を尊ぶ功利觀よりも、結果を作りつゝある精神の働を高しとする理想觀である。更には、人の世の成敗の跡よりも、成敗の底に流れて成敗の外にある精神力を崇むる心である。この心持の相違が、我々の人生觀の根本を決定する。

結果を重んずる人は、どうかして此の世において結果を擧げなければならぬ。故に一切の活動と精魂とは、擧

是認
否認

げてこの結果獲得の最終目的に供されなければならぬ。如何なる智術を以てしても、如何なる手段を用ひても、如何なる犠牲を拂つても、この現實の結果完成のために努力しなければならぬ。それが俗悪非道と言はれようとも、一切は目的達成のために是認せられる。仁義も道德も人情も、要はかゝる目的達成の手段に過ぎない。故に道德の命令と目的達成の成否とが衝突する時は、道德は躊躇なく泥溝の中に遺棄して差支ない。道德も仁義も、自己の目的達成に支障なき範圍内に於てのことである。

道程を愛する心は全然これと異なる。

ある彫刻家が、彫刻するは美しい不朽の作品を作らんが

ためにするのではない。その鑿の一刻みごとに不朽の生命ありとして楽しむのである。彫るごご自身の樂しみである。更には、かゝる美しい作品を腦裡に描き出しつゝある精神の悦びである。かゝる彫刻家にごつては、その業なかばにして、天災のため彼の命は絶え、作品も亦滅ぶごしても、彼はその精神力を働かし得たごごを感謝しつゝ、死するごごを得るのである。

佛人ブートミーの英國人論の中に、ある日、彼がある英人の事務室を訪れた一節がある。その英人が平生の忙しさに似ず、茫然として殆ど失心の態に見受けられたので、怪しんでその故を問ふご、主人は答へて、

ブートミー
佛國の歴史
家。西曆一九
七〇六年。西
七十二。年

茫然
茫然

「私が十數年來努力してゐた事が昨日出來上つてしまつたからさ。」

ごいふ。ブートミーが驚いて、

「そんなに苦心された仕事が出来上つたのなら、さぞ愉快でせうに。」

ごいふご、主人は首を振つて、

「いや、私は長い間苦心經營した目標が、急になくなつたので、今日からまるで何をしていゝか解らないのだ。實に世の中が詰らなくなつた。」

ご言つた。これを聞いてブートミーは心の中で、英國の偉大はこゝにある。ご感嘆したごいふごごである。

英國人は結果を愛せずして、結果に到るまでの道程を愛したのである。それは本當に勞役を愛し、活動を愛する心である。
(中道を歩む心)

二 吉野山

藤岡作太郎

藤岡作太郎
東國と號す、
石川縣の人、
文學博士、
明治四十三年
歿、年四十一。

無雙
無二

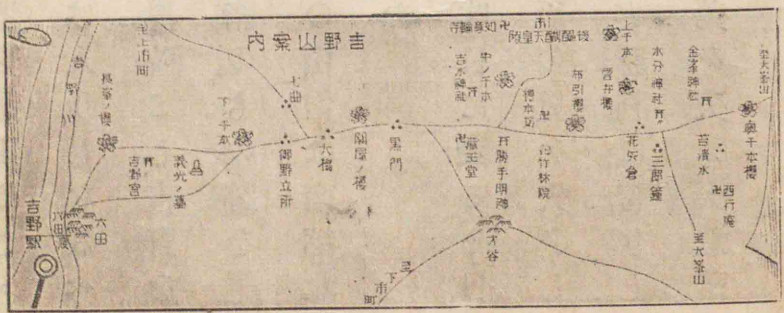
景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきものの世には多かるなるに、景色と歴史とを兼ね備ふる、これ吉野が天下無雙の名區たる所以なるべし。
抑、大和は人皇以來最も古く開けし國にして、従つて此の地も山間の僻地ながら、よく世に知られけらし。南和及び

國栖クニノス
上古吉野山の
奥に住みし土
人の稱。

飛鳥淨御原
の帝
天武天皇。

袖振山
吉野勝手祠畔
にあり、
役行者
名は小角。文
武帝頃の人。

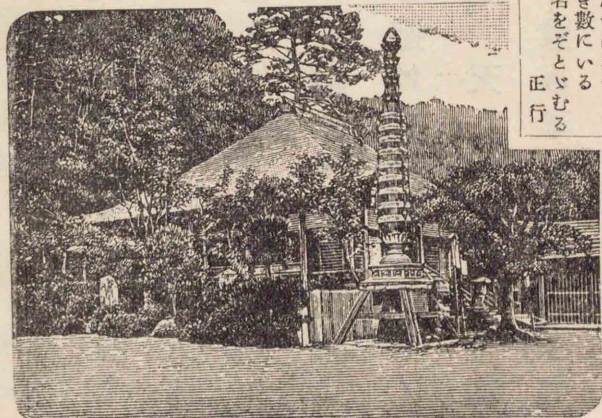
紀伊は木材に富みたる處、それを都に運ぶには、まづ此の地に集めけん。年々に大宮に参りて毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふ山人も、此のあたりにや住みけん。世や、降りては、虎を野に放つと謠はれ給ひし飛鳥淨御原の帝が、世を避けて、風雲に乗ぜん勢を養ひ給ひし處。天女が天降り、袖翻し舞ひて、大御心を慰め奉りぬといふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峰を開きたりといふ役行者



醍醐寺
京都府宇治郡
醍醐村にあ
り、眞言宗。
聖寶僧正
延喜九年(約
一〇二〇年
前)寂、年七
十八。

源廷尉
檢非違使尉源
義經。
兄
佐藤繼信。
弟
佐藤忠信。

かへらじとかねて
思へばあづさ弓
なき数にいる
名をぞとどむる
正行



堂 輪 意 如

は、熊野よりわけ入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正は、こゝより大峰にわけ入りしなるべし。爾來大峰を奥院とし、吉野を本院として、參詣のもの跡を絶たず、金峰山寺の山僧は南都北嶺と肩を比べぬ。
源廷尉が昨日に變る今日の恨、八島に寵臣の兄を失ひしは痛ましけれど、勝利に誇りし時なり、今その弟を失ふ失意落膽の時、英雄の涙そも如何なりけん。

その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、斯る山中を都ぞ定め給ひけるよ。花咲き花散る時、聖帝の^鬼月盈ち月虧くる時、百官の涙。かかるあはれは古に見ざるごころ、後の世にもまた有りなんや。

延元帝
後醍醐天皇。

都だに淋しかりしを雲はれぬ

吉野の奥のさみだれの空

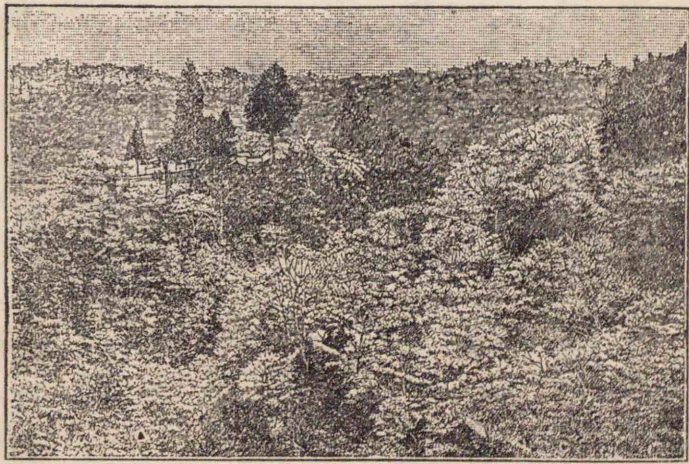
村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の陰に埋め、楠木正行は名残を惜みて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆるこそその後幾度ぞ。運命の寵兒豊太閤は、將卒妻女を率ゐて此處に豪遊し、盃を擧げて花に對し、氣を吐くこゝ千丈、古の

無情
有情

行尊 天台の座主。長承四年(約七九〇年前)寂。年七十九。
花より外に もろともにはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし
じやがて出で 吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん

益軒が筆 和州巡覽記。
鈴の屋 本居宣長の雅

英雄が失敗の跡をや笑ひけん。
大僧正行尊は「花より外に知る人もなし」知己の得難きを恨み、西行法師は「やがて出でじと思ふ身を」言ひて妄語の誹をや得けん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望足れりとする山陽が孝行。その名所を記すること質にして要を得たるは益軒が筆、鈴の屋が菅笠日記なども永く人に忘れられざらん。一



吉野山の奥の千本

貞室 安原氏。俳人。延寶元年(約二五〇年前)歿。年六十四。

支考 各務氏。俳人。享保十六年(約一九〇年前)歿。年六十七。

北畠親房 村上源氏、准后、正平九年(約五七〇年前)薨す。五月 延元元年。

句にして吉野を盡せるもの、名所としては貞室が、

これはくさばかり花の吉野山

舊跡としては支考が、

歌書よりは軍書に悲し吉野山

あり。かばかり名だたる地にして、古人の筆の至れり盡せるを、今更にわれらが幼き筆に何をか言はん、何をか記さん。

(東圃遺稿)

三 行宮の秋霧

北畠親房

五月にもなりぬ。高氏等、西國の兇徒を相語らひて重ねて攻上る。官軍利なくして都に歸り參る程に、同廿七日ま

山門 比叡山延曆寺をいふ。

た山門に臨幸し給ふ。八月に至るまで度々合戦ありしかど、官軍いこ進まず。

東宮

恒良親王、延元三年十五歳にて薨す。

實世

藤原氏、家を洞院と號す。正平十三年(約五七〇年)前、歿、年五十一。

成良親王 後醍醐天皇の皇子。

十月十日の頃にや、山門より還幸、いごあさましかりし事どもなれど、なほ行末をおぼしめす道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣を始めて、さるべき兵もあまた仕うまつりけり。主上をば尊號の儀にてましくき。御心を休め奉らん爲にや、成良親王を東宮にすゑ奉る。

ぞ……ける

同十二月に忍びて都を出でましくて、河内の國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ひ、もこの如く在位の儀にてぞましくけ

こそ……しか

又の年

延元三年。

顯家

親房の長子、殺する時、年二十一。顯能、顯信、顯房。

親王を先だ

義良親王、後醍醐天皇の皇子、後即位ありて、後村上天皇と申す。

苔の下

諸共に苔の下には朽ちずし、てうづもれぬ名を見るぞ悲しき。(金葉集和泉式部)

ぞ……し

る。内侍所も遷らせ給ひ、神璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特のここにこそ侍りしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起す輩も侍りき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひあまた聞えしかど、次の年も暮れぬ。又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、又親王を先立だて申し、重ねて打ちのぼる。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戦あまた、び互に勝負侍りしに、同五月和泉の國にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道こゝにて極り侍りにき。苔の下にもうづもれぬものこては、唯いたづらに名をのみぞごめし。心うき世にも侍りしかな。官

軍なほ心を勵まして、男山に陣をどりて、しばらく合戦ありしかど、朝敵しのびて社壇を焼き拂ひしより、事成らずして引退く。北國なる義貞も、たびく召されしかど上りあへず、させること無くて空しくなりぬご聞えしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の御子又東へ向はしめ給ふべき定あり。左少將顯信朝臣、中將に轉じ從三位に叙し、陸奥介鎮守將軍を兼ねて遣さる。東國の官軍悉くかの節度に従ふべき由を仰せらる。親王は儲君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道の程もかたじけなかるべし、國にてはあらはさせ給へ。ごなん申されし。異母の御兄も

陸奥の御子

義良親王。

顯信

顯家の弟。

トクニイタイワリイイヨウガ

なん……し

數多ましししに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末つ方伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろおどろしく海上荒くなりければ、また伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いこゝ波風夥しくなりて、數多の船ゆき方知らずなりけるに、御子の御船はさはりなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣はもごより御船にさぶらひけり。同じ風のまぎれに、東をさして常陸の國なる内の海に着きたる船侍りき。方々に漂ひし中に、此の二つの船、同じ風にて東西に吹分けらるゝ、末の世にはめづらかなるためしにぞ

内の海

常陸の霞ヶ浦
なりといふ。
この舟に親房
は乗れるなり。

ぞ……べき

胎中天皇
應神天皇。

宸襟
叡慮

や……べさ
神皇正統記
延元四年、親
房常陸に在り
て此の書を著
し、興國四年
に少しく修正
せりといふ。

むかし仲哀天皇、熊襲を攻めさせ給ひし行宮にて神去り
まし〜き。されど神功皇后ほどなく三韓を平げ、諸皇子
の亂を鎮められて、胎中の天皇の御代に定まりき。此の君
聖運まし〜しかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を
しらせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功も
なく徳もなきぬすびご世に起りて、四年あまりがほど宸襟
を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末むなく
侍りなんや。今の御門また天照大神より以來の正統を受
けまし〜ぬれば、此の御光に争ひ奉るものやあるべき。
なか〜かくて靜まるべき時の運ごぞおぼえ侍る。

(神皇正統記)

千家元麿
東京市の人、
詩人。

四 麥

千家元麿

麥は健かに豊かに村を包んでゆく
日光を戀ふるものやうに快活に青々と明るんで
麥は豊かに貧しい村を包んでゆく
麥の中に包まれた百姓家の美しき
麥はまるで廣い海のやう
麥の中に人や家々や太陽は没してゆく
おゝ一面の麥 太陽の麥
麥の上の空の一片の雲もない朗かさ
おゝ麥 麥 快活の麥
豊かで新鮮で明るい麥
伸びてゆく麥

勇敢
敢爲

風はそこに來て彼等を輕らかにゆすつて
 彼等を愛撫するやうに見える
 風はそこに來て日中樂しく遊ぶやうに見える
 麥を見ると俺は明るさを思ひ 快活になり
 豊かな廣々した麥のために歌ひたくなる
 麥よ 伸びよ 健かに樂しく
 暑い日 黄金に熟して刈り倒されるまで
 彼等の道中の樂しさよ またお前の勇敢さよ
 まるで人の爲に生えてくれるやうな
 お前麥よ
 俺は有難く思ふぞ
 健かな麥 快活な麥

燦然
闌干

霜の置く嚴寒の季節から辛苦しながら
 しかし快活に人のために盛に生えてくれる麥よ
 俺は喜ぶよ 麥

星

星よ
 夕焼の焰ヒラヒラの中につままれて
 燦然と輝いてゐる
 星よ
 お、お前は随分高くのぼつたな
 太陽の去つたあとの世界に
 天高く輝くお前は

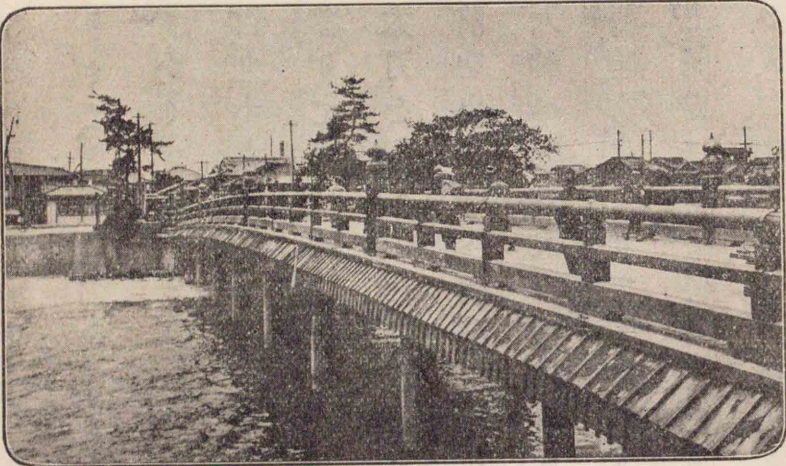
祝詩
頌歌

何といふ光榮だ
 星よ 自分もお前を祝福する
 お前が我等に希望と悦びを與へてくれるやうに
 自分は祝詩を捧げる
 こゝから
 この暗い畠の道から

喜びは

苦しみや淋しさは
 一人でも引受けられる
 けれども喜びは
 一人では背負へない

辨慶 武藏坊辨慶。
 秀衡 藤原氏、陸奥守、鎮守、府將軍。
 松浦の大夫 源綱、頼光四天王の一人、肥前國松浦に住みしより、子孫松浦氏といふ。



五 太刀取

辨慶思ひけるは、人の重寶は
 京 千そろへて持つぞ。奥州の秀
 都 衡は名馬千疋、鎧千領、松浦の大
 五 夫は胡籙千腰、弓千張。かやう
 條 に重寶を揃へて持つに、いで我
 橋 は夜に入つて京中に佇みて人
 の佩きたる太刀千振取つて我
 が重寶にせんと思ひ、夜なく
 人の太刀を奪ひ取る。しばし

こそ…けれ

こそありけれ、當時洛中に長一丈ばかりある天狗法師のありきて、人の太刀を取るこそぞ申しける。

利生
冥利益
ぞ…たる

かくて、今年も暮れ、次の年の五月の末六月の初までに、九百九十九腰こそ取つたりけれ。六月十七日五條の天神に参りて夜と共に祈念申しけるは、今夜の御利生に、よからん太刀を與へてたび給へ」と祈誓し、夜も更けぬれば天神の御前を出て、南へ向ひて行くく、人の家の築土の際に佇みて、天神へ参る人の中に、良き太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。暁方になりて堀河を下りに行きければ、面白き笛の音こそ聞えけれ。辨慶之を聞きて面白や、さ夜ふけて天神へ参る人の吹く笛は、法師やらん、男やらん。よからん太刀を持

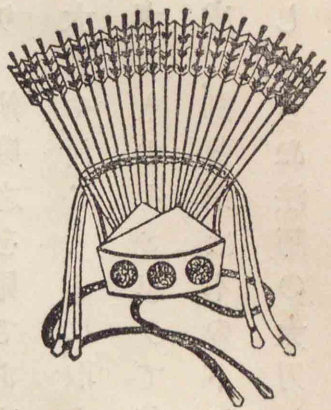
ちたらば取らん」と思ひて、笛の音の近づきければ、さしく

みて見れば、未だ若き人の、白き直垂に胸板を白くしたる腹巻に金作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。辨慶之を見て、あはれ太刀や、何ごもあれ、取らんずるものをご思ひて待つ處に、御曹司は、木の下にけしからぬ法師の太刀わきばさみて立ちたるを見給ひて、彼奴は只者ならず、此の比、都

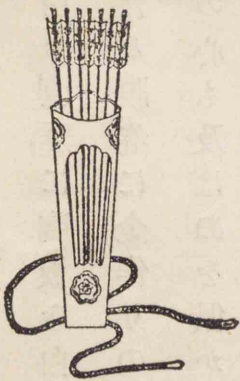
取らんずる
取らず
御曹司
九郎義經。



こそ…候へ



平 胡 籙



壺 胡 籙

に人の太刀を奪ひ取る者はきやつにてあるよご思はれて、
 少しもひるまずかゝり給ふ。辨
 慶現れ出で申しけるは、只今しづ
 まりて敵を待つ處に、けしからぬ
 人の物の具して通り給ふこそ怪
 しく存じ候へ。左右なくてこそ
 通すまじけれ。然らずば其の太
 刀こなたへ賜ひて通られ候へ。こ
 申しければ、御曹司之を聞き給ひ
 て、此の程さるをこの者ありごは
 聞及びたり。左右なく得こそ取らすまじけれ。ほしくば

こそ…ね
弓手
馬手

よりて取れ」ごぞ仰せられける。さては見參に參らん。さて、太
 刀を抜いて飛んでかゝる。御曹司も小太刀を抜いて、築土
 のもごに走り寄り給ふ。武藏坊之を見て、鬼神ごもいへ、當
 時我を相手にすべき者こそ覺えね。さて、もつて開いて丁ご
 打つ。御曹司、こはけなげ者かなごて、電の如くに弓手の脇
 へつご入り給へば、うち開く太刀にて、築土の腹に切先うち
 立て、抜かんごしける隙に、御曹司走り寄りて、弓手の足を差
 出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀を
 からりご捨てたるを取つて、えいやごいふ聲のうちに、九尺
 許ありける築土にゆらりご飛上り給ふ。辨慶胸いたく踏
 まれぬ、鬼神に太刀ごられたる心地して、呆れてぞ立つたり

思はんずる

ける。
御曹司「是より後にかゝる狼藉すな。さるをこの者あり
ごかねて聞きつるぞ。太刀も取りて行かんご思へども、欲
しさに取りたりご思はんずる程に、取らするぞ。」さて、築土の
おほひに押しあてて、踏みゆがめてぞ投げかけ給ふ。辨慶
太刀取つて押直し、御曹司の方をつらげに見やりて、念なく
御邊はせられて候ふものかな。常に此の邊におはする人
ご見るぞ。今宵こそ仕損ずごも、是より後に於ては心ゆる
すまじき物を「ご、つぶやきく」ぞ行きける。(義經記)

蛇は寸にして牛を呑むの氣象ありごかや。さればこそ傳

義經記

八卷、源義經
の一代記、元
祿十年刊行、
作者未詳。

中村孝也

群馬縣の人、
歴史家、文學
博士、史料編
纂官。

菊池寛

高松市の人、
小説家。

六 槍中村

菊池 寛

説は多くの美しき武勇談を以て、義經の少年時代を粉飾する
につこむ。就中我等は五條橋にて辨慶と邂逅せる有名なる
物語を以て最も興味深きものなりご思ふ。三五の月は皎々
として天にあり。川浪激して玉ご亂る、橋の上、切りつ結び
つ秘術を盡して相争ふ、美しくも亦勇ましき光景は、幾百年、人
の心をそゝのかしつ。今も猶いたいけの少年、飛鳥の如く欄
干高く躍り上る牛若丸を知らざるものなし。優なるかな。
(源九郎義經—中村孝也)

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内
中國に聞えた大豪の士であつた。

その頃畿内を分領してゐた筒井松永、荒木和田、別所など大名小

大身槍

刃の長大なる

素槍。

猩々緋

濃く鮮かなる

打裂

打裂羽織。背

縫の中央以下

を縫ひ合せず

やうにした羽

織。

唐冠纓金

唐冠は兜の鉢

を唐制の冠に

似せて作れる

もの。纓金は

兜の忍緒が

黄金色をなせ

ふ。ものと云

名の手の者で「槍中村」を知らぬ者は恐らく一人もなかつたらう。それ程新兵衛はその扱き出す三間柄の大身槍の鋒先で、先駆殿の功名を重ねてゐた。その上、彼の武者姿は戰場に於て、水際立つた華やかさを示してゐた。火のやうな猩々緋の打裂を著て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵身方の間に輝くばかりのけざやかさを持つてゐた。

「あゝ、猩々緋よ、唐冠よ。」と敵の雑兵は新兵衛の槍先を避けた。身方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へてゐる猩々緋の姿は、これ程身方に取つて頼もしいものであつたか分らぬ。又嵐のやうに敵陣に殺到する時、その先頭に輝いてゐる唐冠の兜は、敵に取つて、これ程の脅威であつたか分らぬ。かうして槍中村の猩々緋と唐冠の兜は、戦場の華であり、敵に對する脅威であり、身方に取つては信頼の的であつた。

「新兵衛殿折入つてお願がある。」と、或日、元服してから、まだ間もないらしい年若な士が、新兵衛の前に手を突いた。

「何事ぢや、そなたと我等の間に、さやうな辭儀は入らぬぞ。望こいふを早ういうて見い。」と、育むやうな慈顔を以て、新兵衛は相手を見た。

その若い士は新兵衛の主君松山新介の庶子であつた。そして幼少の頃から、新兵衛が守役として、我が子のやうに慈み育てて來たのであつた。

「外の事でもをりない。明日は我等初陣ぢや程に、何ぞ華々しい手柄をして見たい。就いては、お身様の猩々緋と唐冠の兜を貸してたもらぬか。あの打裂と兜を着て、敵の眼を駭かして見たい。ござる。」

「ハ、ハ、念もない事ぢや。新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は

早う。いうて

相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れる事が出来た。
「が、申して置く。あの打裂や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢやわ。
そなたがあ品の品々を身に着ける上からは、我等ほどの肝魂を持た
いでは叶はぬ事ぞ。」といひながら、新兵衛は又高らかに笑つた。

そのあくる日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵
と鎬を削つた。戦が始まる前、いつものやうに猩々緋の武者が唐
冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗を
したかと思ふと、駒の頭を立て直して、一氣に敵陣に乘入つた。

吹分けられたやうに敵陣の一角が亂れた處を、猩々緋の武者は
槍を付けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突き伏せて、又悠
悠と身方の陣へ引きかへした。

黒革緋
鎧の緋糸の黒
革(紺にて深
く染めたる)
なるもの。

その日に限つて黒革緋の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つてゐた中
村新兵衛は會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者振りを眺めて

南蠻鐵
昔時、輸入せ
られたる精鍊
したる鐵。

ゐた。そして自分の形だけすら、これ程の力を持つてゐるといふ
事に、可なり大きい誇を感じてゐた。

彼は二番槍は自分が合はさうと思つたので、駒を乗出すと一文
字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戦はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵
衛の前には、びくともじなかつた。その上に、彼等は猩々緋の「槍中
村」に突き擾された恨を、此の黒革緋の武者の上に復讐せんとして
猛り立つた。

新兵衛は何時もとは勝手が違つてゐる事に氣が付いた。何時
もは虎に向つてゐる羊のやうな怖氣が敵に在つた。彼等が狼狽
して血迷ふところを突き伏せるのに、何の雜作もなかつた。今日
は彼等は對等の戦をする時のやうに、勇み立つてゐた。どの雜兵
も十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突き伏せる事

さへ容易ではなかつた。敵の槍の鋒先が、ごもすれば身をかすつた。新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つた。が、彼は、ごもすれば突き負けさうになつた。手輕に兜や猩々緋を貸した事を後悔するやうな感じが頭の中を掠めた時であつた。敵の突き出した槍が緋の裏をかいて彼の脾腹を貫いてゐた。(極樂)

七 春より夏へ

ほろさるや傘高低にわたし舟

夕月や納屋らうまやも梅の影

村らちれ柳月にある田打の影

やまふさの雨や雙親また阿里

大佛を寫真にさるや春の山

子規

鳴雪

青々

虚子

碧梧桐

子規 正岡氏。明治三十五年歿。

鳴雪

内藤氏、大正十五年歿。

青々

松瀬氏、大阪の俳人。

虚子

高濱氏、東京の俳人。

碧梧桐

河東氏、東京の俳人。

句佛

大谷光演、東本願寺前法主

石鼎

原氏。東京の俳人。

乙字

大須賀氏、大正九年歿。

花菱

鈴木氏、東京の俳人。

幸田露伴

名は成行、東京の人、文學博士、文學者。

品川

東京府荏原郡市街は東京市に接續す。

撫子や菘にせりくろ猿まき

眼のほろりぬ清相うつり覆われ

蓮田菖田水銀橋たなりの社より

夕蔭れすし見えく静涼

句佛

石鼎

乙字

花菱

八 涼み臺

幸田露伴

浴後に單衣の糊ごはなるを着て、家の前なる涼み臺に、團扇を揮ひつゝ、肩張らぬ物語仕りたらんは、涼めよと吹く風の手前もよかるべきか。おとし話もさまざま、姿あるものなり。

「昨日品川で飯を食つたが、又格別食物がよいわい。まあ、汁が小つみ入れに青みて、膾が生け盛り、平がのつべいサ。」

をかしさ

「ム、そして向うは。何だ、向うごは。向うを知らぬか。」ム、知つてゐる。安房上總だ。」

こいへる類は間違はざるつもりの間違のをかしさなり。姿に無理も無く、格も悪しからぬ咄といふべし。



「この大黒天を求めてから損ばかりする、福の神ではない、貧乏神ちや。捨てるも勿體ないから、川へ流して来い。必ず人に遣るな。」主人言ひつくる。

「かしこまりました。」大黒を持ちゆきしが、忽ち歸りければ、これ權助、川へ流して来たか。「いや、人に遣りました。」あれ

遣らう

程遣るなと言ひつけたに。「はい、然しその大黒をくれるなら酒錢を遣らうと、三百文くれましたから遣りました。」それ見ろ。はや先の人に三百文といふ損をかけた。」

くごきだけ面白からねど、道理のつけかたの違ひたるをかしさも、これ程なるは上品にてよし。

「芝の切通しに狼が百ほど出る。」「ごんだ嘘をつくな。」「いや、五十ほどは出る。」「なに、嘘を。」「四五匹はきつと出る。」「こいつ嘘をつく奴だ。」「いやどうか出さうな處だと思つた。」

これらは、おとし話の上乗こいふべきにや。思へば思ふほどをかしき風情あるなり。

「昨日釣に出て素敵な黒鯛を釣つた。」「どれほど大きかつ

芝
東京市芝區。

た。「蛇の目傘ほどよ。」と言ひしが、はつこ心付きて、「惜しいこ
ごに絲が切れた。」

これも前のとほゞ似よりたる情合のをかしさなり。

「御免なされ。」といひながら鬼が飛びこむ故、「どうした。」と問
へば、「いま生酔なまぞよが来る。」といふ。「鬼もあるものが生酔を恐
れてなるものか。」といへば、「醒さむれば正氣でござる。」

これは、正氣と鍾馗かねわらわとの同音異義なるところに縋たりしばかり
の、面白からぬさげともいふべし。今は落し話といへば人みな
この類のものと思へるも口惜し。

河豚汁をこしらへたれど食ひかねて、先づ乞食に與へ、ほ
どたちて様子を見るに無事なれば、皆々食ひ仕舞ひて暖か
になり、ぶら／＼と歩いてまた乞食のところに来かゝり、さ
つきの河豚はよかつたな。」といへば、あなた方も召上りまし
たか。」といふ。「おゝ、食つたことも。」といふ。「そんなら私もいた
だきませう。」

この類のことは實際に多きものなり。落語の寫實派とや評
せん。

筆蹟
夏川や何處か
で笛を吹いて
居る露伴

夏川
何處か
吹いて居る
露伴

なまけもの、商賣は勤めいで稻荷へ願をかけ、「どうか金銀

を授けて下され。といふ。ある朝起きいでて見れば、額の右に金の角、左に銀の角生ひ出でて、鬼のやうになりたり。取らんとして、も取れず。大いに弱りて、取る道はなきか。三稻荷へ願ふに、稻荷、夢枕に立ち給ひて、その工夫を貴様の知らぬここか、鼻のあたりに桂馬でも打つて見よ。」

これは、まんばち咄の上乗なるべし。落語の理想派などいふべきか。

「おらは昨夜鯨を夢に見たが、さても大きなものであつた。」「どれほどあつた。」「さうさ、あのくら闇ほど。」

こは、比較の度を外れたるをかしさなり。落語としては姿すぐれたるものといふべし。(調言)

さうさ

菊地幽芳

名は清、水戸の人、小説家。

金ヶ崎神社

福井縣(越前)敦賀町の東北端の海岸にあり。金ヶ崎宮といふ。官幣中社。

天筒山

金ヶ崎の東南に連接する山峰。

延元の役

延元元年(約五九〇年前)、高足利高經・高師泰等大軍を以て金ヶ崎城を圍む。二年三月城遂に陥る。

藤原行房

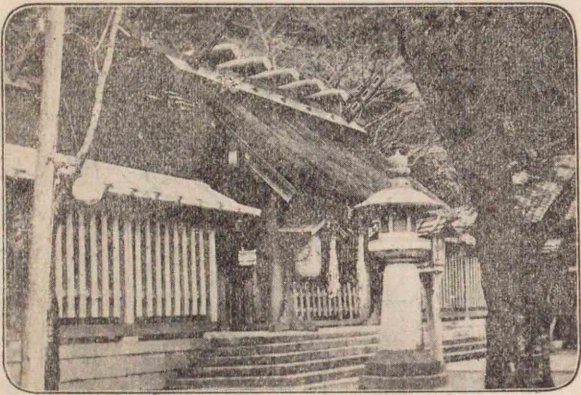
義貞の妹婿。

新田義顯

義貞の長子。

瓜生保

越前の人、柚山城に在り。



九 金ヶ崎懷古

菊池 幽芳

金ヶ崎神社は、天筒山の一脈、敦賀灣に斗出し、金ヶ崎の岬をなせる山崖にあり。祠のある所、即ち金ヶ崎城の遺址なり。といふ。後醍醐天皇の皇子尊良・恒良兩親王を祀れるなり。石燈の半より、少しく右に登れる處に、攝社絹掛神社あり。こは同じ延元の役に殉せる、藤原行房・新田義顯・氣比氏治・瓜生保等の靈を祀れるもの、祠の傍に、延元古戦場の

脇屋義治を奉じて義兵を擧げ、戦功あり、延元二年金ヶ崎を援はんとし、戦死す。

野坂榮螺

野坂山は敦賀の西南に、榮螺は敦賀の西北に立石半島にあり、共に越前若狭の境上に位す。

立石岬

敦賀灣の西方を蔽ふ半島の北端

潜々 滂沱

碑あり。

境内に櫻と楓と多く、春は吉野の宮の故事をしのばせて、一夜の嵐にかつ散る皇子等の脆き散際を想はしめ、秋は一片の丹心、王事に殉ぜる諸將の血もて、木々の梢を彩るか、疑はしむ。仰げば天筒山の翠袖に滴らんとし、野坂榮螺の高峰参差として、或は雲を抜き、或は雲に隠れ、逆まに影を敦賀灣に蘸す。一角遙かに出でて灣を抱くものは、立石の岬にあらずや。嘗て碧血を流せるの地、風光一に何ぞ佳なる。余低回顧望し、覺えず潜々として涙下る。金ヶ崎城没落の歴史は、實に何人をも流涕せしむべき悲劇にあらずや。

思ふに、延元元年冬十月、新田義貞、東宮恒良親王一の宮尊

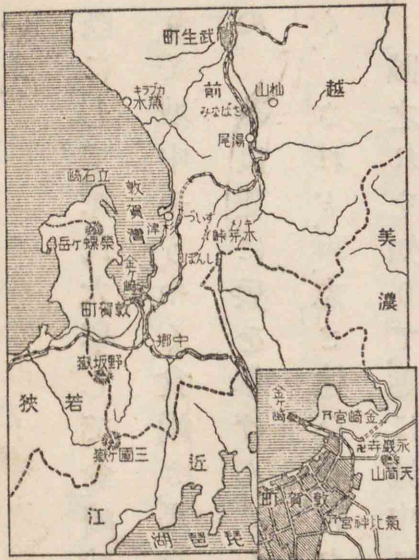
義貞 義顯 義興 義助 義治

木芽峠

敦賀郡と南條郡との境上にあり、古來要害の地とす。

氣比宮

敦賀町にあり、氣比神宮といふ、伊香沙別命、日本武尊の外五神を祀る、官幣大社。



敦賀附近地圖

良親王を奉じ、北國に赴き、恢復を謀らん。供奉の人々は誰れぞ。洞院實世、同定世、藤原行房、同行尹、三條泰季等の公卿に、義貞、義顯、脇屋義助等の一族郎黨、併せて七千餘騎、木芽峠にて大雪に逢ひ、士卒凍死するもの多く、やうやくにして敦賀に著けば、氣比宮の祠官氣比氏治等、迎へて金ヶ崎城に入る。その月二十日、義貞、兩宮を船に誘ひまゐらせ、漁舟一篷の月を載せて、管絃の御遊を催し、越路の空の草枕、逆旅の御情を慰

助肋

頭大夫行房
行房、藏人、頭にて左京大夫を兼ねたり。

氣比齊晴
氏治の子。
燕木浦
南條郡の海岸、敦賀より十一海里に當るといふ。

て、右の脇の肋骨二三枚かけてかき破り、その刀を抜きて、宮の御前に差置けば、宮は、やがてその刀を取り、雪なす御膚を現にし、ぐさご御胸のあたりに突き立て、義顯が枕の上に伏させ給ふ。頭大夫行房以下、いざさらば、宮の御供仕らん。こて、一度に皆腹を切れば、庭上に並み居たる三百餘人の兵士、互に刺し違へ、刺し違へ、いやが上に重り死しぬ。こ、これ太平記の傳ふる所、かくて、金崎城は遂に陥りぬ。

これよりさき、氣比齊晴、御年まだ十五にて渡らせらるゝ、東宮をば、小舟に乗せまゐらせ、燕木浦に落しまゐらせたるを、無慚や、夜明けて敵の手に捕へられ、やがて京師に送られて、四月十三日、足利直義の進めたる鳩毒のため、~~果敢なく~~嘗

の花を散らさせ給ひぬ。之を金崎城没落の哀史とす。

事の悲惨なる、斯くの如きはあらじ。われ今來りて金崎の一角に立てば、江山蕭條として、陰雲低れ迷ひ、日色暗くして、氣沈み、風死して、細雨濺ぐ。敦賀灣の水面一波を擧げず。敵ご見ゆる。鷗もなければ、哄の聲に紛ふ松風の響もなし。

烟雨淡々として、海と山と靜かに暮れんとす。あはれ悲劇を見しものは、江山にあらずや。悲劇を語るものは、江山にあらずや。われ一たび江山に對して、相識の如し。頭を擧げて山を見、頭を垂れて海を見る。之を久しうして、跣去るここ能はず。(日本海周遊記)

跣去

高濱虚子

名は清、愛媛縣松山市の俳人。

雨月物語

上田秋成著、「白雲」以下九篇の物語を集む。

弘法大師

俗姓佐伯、讚岐の人、大同三年唐より歸り、眞言宗を傳ふ、高野山金剛峯寺を創む、承和二年(約一〇九〇年前)歿。

一〇 佛法僧

高濱虚子

「雨月物語」を見た人は、高野山といへば一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮かべるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に、

閑林独坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。

一鳥有聲人有心。聲心雲水俱了々。

とあるやうに、其の啼き聲がぶつ、ぼふ、そうと聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特に持て囃されてゐる。是に於てか秀吉の歌といふに、

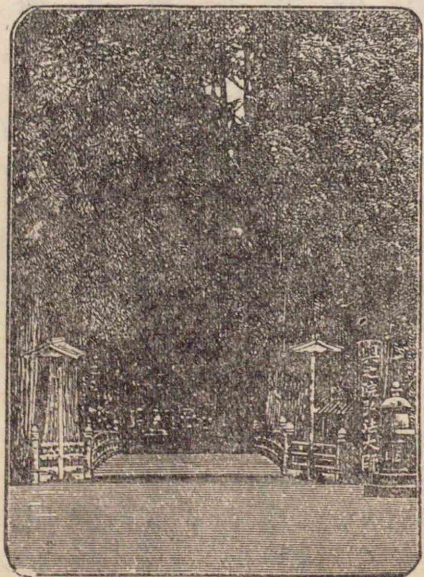
傳へにし鳥も御法を行ひの

聲は高野にありあけの月

上田秋成
大坂の人、國學者、文化七年(約一七五八年)歿、七十八。
豊臣秀次
秀吉の養子、文祿四年(約一六二三年)死、高野山にて。

ごかいふのがある。公卿僧侶の歌は固より澤山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豊臣秀次の幽靈を配して「雨月物語」の一章としてゐる。其の物語は趣味ある文字として、嘗て愛誦した事があつた。

「今夜奥の院に行つて佛法僧の啼き聲を聞いて來るから。」と言つて、小僧さんから提灯を借りて表に出る。表は暗い。星はあるが僅かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯を便りに其の白い土塀に添うて表通りの奥の院道に出る。門前の珠數屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な



高野山の奥の院

杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が襖の如く連なつてゐる。其の左右の襖でたて切つた中に、帯のやうに幅の狭い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提灯の光で僅かに足許を探つて歩く。晝間は氣が附かなかつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集まつてゐる。未央君は提灯をさし上げて、其の杉の幹に押しつけるやうにして歩く。未央君が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照らし盡さぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。

寝鳥の立つ音がする。見ると、提灯の上から圓筒の如く丸い光が空中に射出されて、それが高い／＼杉の梢をさまようてゐる。

未央
姓は三輪、名古屋市の人、俳人。

見える

釣狐の狂言
狐、獵師の伯父の白藏主といふ僧に化け、狐釣を止めさせんとする狂言。

御廟
弘法大師の廟、奥院谷にあり。

寝鳥が泡を食ふのも尤もだ。

歩きながら、未央君に「雨月物語」の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつてゐる。何處やら心細くなる。斯ういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に薄ぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと思ひながら行く、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかゝつてゐる。

向うからふら／＼と提灯が一つ来る。急に見えなくなるのは杉の木に隠れるのであらう。直また現れる。近づいて見る、一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見る、釣狐の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい灯が三つともつてゐる。近寄つて見る、御廟の橋だ。未央君が橋の上から提灯をつり下げて水面を照らし

玉川 高野山奥の院
道にある谿
流。
燈籠堂 弘法大師廟前
の拜殿。

て見る。玉川の水は火を受けてちら／＼と流れてゐる。燈籠堂はもう直其處に在る筈だが眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すつかり四周の蔀を下して、寂然として寝靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠のこもり連なつてゐる夜の景色は、淋しくも嚴かであらうと思つて、樂しみにしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。

御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい釣燈籠がこもつてゐる。其の光で僅かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立とが見える。

法隆寺 奈良縣生駒郡
法隆寺村、法
相宗の大本山

燈籠堂の裏側の縁に腰をかけた。我等を少し離れて、縁に置かれた提灯の灯が心細さうにまたゝいてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方

聞える

心細さうに

角は御廟の後に當る。そんな方に寺はない筈だが不思議だと思ふ。其の鉦の音に聴きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけた／＼ましい鳴き聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、今の鳴き聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて提灯をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせゐるか、提灯の灯は一層心細さうに瞬いてゐる。小さい咳拂ひが聞える。おやと思ふ内、又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸した明りがある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試みに其の傍に行つて、「もし、／＼。」と呼んで見る。

「へい。」と返事をする。「一寸伺ひますが、あの恐ろしい啼き聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です。」といふ。「へえ、何といふ獸です。」と聞く。「野衾」というて、蝙蝠のやうな、馳ちのやうな、妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野衾か、合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人は一寸黙つてゐたが、あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

聞かう。
互えた

鉦の音かと思つてゐたのが鳥の鳴き聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞かう爲に來た佛法僧であつたのは、愈、意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。矢張カン／＼／＼と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、カンと響く前にブツといふ低い音が聞える。ブツと低く響いてからカンと高い互えた音が響く。

つまり、ブツカン、ブツカンと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くところがあるが、雨月物語には佛法といふ字に態々「ぶつばん」と假字が振つてあつて、ブツパン、ブツパンと鳴くこと書いてあつたやうに記憶する。實際の鳴き聲はブツカン、ブツカンと聞えるが、先づ「雨月物語」のブツパンに近いやうだ。

妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは、正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を連想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に濕ひのあつた事に氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならぬと鳴かぬのに、今晚は宵の口から頻りに鳴いてゐた。」といふ。さういふ内も絶えずブツカン、ブツカンと聞える。普通の鳥とは餘程違つてゐる。法の御山の靈鳥として恥かしからぬ不思議の鳥だ。古

來幾多の詩歌がこれを持って囃したのも尤もだ。私は嘗て高野の山の靈山であることは奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々杉はものかは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。

見ると遙か彼方の縁に置かれた提灯の灯も、今は靜かにともつてゐる。番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶、話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ／＼話をする。この話も耳新しく面白かつたが、中にも、此の燈籠堂で焚く油は夥しいもので、月に一石から二石の間を往來してゐる、殊に三月二十一日の御影供の時は、一日に一石の油を焚くといふ事、貧の一燈の灯は信者の所望によつて線香に移してやる、それを北海道や九州あたりまで持つて歸る。中には途中で消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは、面白かつた。

貧の一燈
燈籠堂にある
不斷の燈明を
いふ。

就く
著く

水向地藏

奥の院道にあ
り、參詣の者
必ず水を手向
く。故に名あ
り。

夢然

僧の名。この
篇の主人公。

ふと氣がつくと、佛法僧は何時の間やら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな鳴き聲をする。歸途に就く。

御廟の橋にかゝつた時、未央君が「また鳴く。」といふ。向うの墓原を縫ふやうに提灯が一つ來る。女が三人に男が一人、南無大師遍照金剛と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。(十五代將軍)

御廟のうしろの林に覺えて佛法々々もなく鳥の音山彦にこたへて近く聞ゆ。夢然目さむる心地して、あな珍らし、あなく鳥こそ佛法僧といふならめ、かねてこの山にのみ栖みつることは聞きしかど、まさにその音を聞きしといふ人もなきに、今宵の宿り、まことに滅罪生善の祥なるや。かの鳥は清淨の地をえらみてすめるよしなり。上野國迦葉山下野國二荒

山山城國醍醐の峯河内の科長山就中この山にすむこと、大師の詩偈ありて、世の人よく知れり。(雨月物語—上田秋成)

雨月物語

上田秋成の小説、三卷あり。

大谷光瑞

前西本願寺法主。今上海にあり。

伯夷・叔齊

支那殷代の賢人の兄弟なり。殷の亡ぶや、義として周の粟を食はず、首陽山に薇を取つて食ふ、遂に餓死す。

一一 是是非非

大谷光瑞

新を好み舊を厭ふは人の情なり。然れども新必ずしも良からず、舊必ずしも否ならず。請ふ看よ、米麥の人の食する所たるや、太古より然り。之に代ふるに薇を以てせば、伯夷・叔齊と雖も餓死す。その含水炭素たる、その窒素たる、決して米麥のみの専有物にあらず。寧ろ數千年來人類の使用に供せるものの可なるに如かず。然れども虎豹を馴らし、之に技を習はしむるや、人錢を投じて之を見る。牛馬を

撰選擇
ぶぶぶ

馴養するや、人の顧みるものなし。而して虎豹は人の用をなさず。牛馬は盡く用をなせり。世に新思想を喜び、新人を尙び、萬事新を好むは、虎豹を養うて牛馬を忘る。その身敗亡を免れ得ば至幸のみ。

要は事の良否を擇ぶに在り。新舊を以て良否に代ふるに非ざるなり。若し新を競は、遷轉萬狀、遂に休止の期なし。而して身老い死に至つて一日の安きを得ず。これ皆良否と新舊とを混同せるの弊なり。

凡そ物に大小あり。大にして用をなすものあり。小にして用をなすものあり。その用不用と大小とは相關連す

鶴の脛云々
莊子の語

る所なし。象をして豚たらしめば、物小に變じて用なく、猫をして虎たらしめば、物大に變じて用なし。故に曰く、鶴の脛長し、雖も之を斷たば悲まん、鳧の脛短し、雖も之を續がば悲まん。鶴脛長にして用あり、鳧脛短にして用あり。長短と用途と各別あり。

崇拜
心酔

今の世の愚者、漫りに歐米を崇拜し、百事これが模倣に勉むるが如きは、即ち象をして豚たらしめ、猫をして虎たらしめ、鶴脛を斷ち、鳧脛を續ぐの徒なり。亦笑ふべきの至なりとす。

鵠は云々
鵠不日浴而白、烏不日而黑。(莊子)

古に曰く、鵠は日に浴せずして白し、烏は日に黔せずして

耽溺
惑溺

黒し。實に然り。其の性に從ひ、各色を異にせり。鵠を黔するも黒からず、烏を浴せしむるも白からず。故に曰ふ、倫理道德の如きは、その國民の固有せる歴史により定められたるものにして、他の模倣を容すべからずと。

我が國の愚者、徒らに歐米崇拜に耽溺し、歐米の國民性及び歴史に適合せる倫理道德を直ちに我が國に用ひんとす。これ鵠を黔し、烏を浴せしめ、その黑白を顛倒せんことを欲するの類なり。(無題錄)

日本人は、東洋人でありながら、西洋人の仲間へ這入つて西洋人扱される事を名譽だと思得てゐる。私は、池に金魚と鮒を飼つた事がある。鮒は金魚と同化して、すっかり金魚氣

佐々木指月
名は榮多、神奈川縣人、美術家に於て文學をよくす。

取てゐたが、その後、私は四五匹の鮒をその池へ入れた。すると先住の鮒は金魚と一緒に泳いで、後來の鮒は暫く一緒にならなかつた。然し追々にやはり先天の鮒根性を現して、後來の鮒の仲間へ這入つて、金魚と一緒に泳がなくなつてしまつた。日本人は丁度この先住の鮒のやうなもので、いや英語だ、いや佛語だ、羅馬字だなどと騒いでゐるが、それは金魚かぶれしてゐるうちだけのこと、やがて東洋といふ鮒が文明の池へ泳ぎ込む日になると、日本人はやはり鮒に逆もどりせずばなるまい。

金魚の眞似をしたところで、鮒は金魚になりはしない。それよりも、鮒は鮒で立派に鮒文明を築くがい、ぢやないかと、米國に十八年ゐて、金魚になれない日本人が言つたと傳へて下さい。(鮒と金魚——佐々木指月)

吉田絃二郎

本名源二郎、福岡の人、文學者。

上高地

長野縣南安曇郡島々驛より西北六里許にある海拔一五〇〇米の高原。

松本

長野縣の中央市に位する都

梓川

槍ヶ嶽附近より發し上高地を過ぎ、厚川に入る。

島々

長野縣南安曇郡梓川の北岸にして飛驒路の小驛。

午後二時

昭和二年七月十八日

一一一 上高地

吉田絃二郎

日本アルプス上高地は、久しい間の私のあこがれの地であつた。松本の町を出て間もなく松並木に沿ひ、梓川を右に見、飛驒高山への街道の古驛舊宿を過ぐれば、山

吉田絃二郎



はいよく、迫り、川はいよく、白き瀬をなして流れてゐる。

梓川の長い橋を渡り、水柳の柔かな影を眺めつゝ、島々に着く。

午後二時、道は島々谷南澤の流に、より、ところ／＼、霧のやうな飛沫

を浴びて、歩一步溪に入る。上高地まで山溪六里、前程を思つて先づ靴の紐を結ぶ。

山は迫つて溪は深く、岩を切り、崖を削つて、纔かに一筋の小徑を通ずるのみである。

山は雲にかゝり、溪は蔭暗くして奔湍雪の如し。斷崖諸處にかかつて行人の脚をこぼむ。桂、橡、白樺などが殊に多く、桂は二抱へ三抱へのものも珍しくはない。岩魚留いわまどの桂は周圍二丈三尺、丸味を帯びて雨にぬれた葉のやはらかなのは、ごりわけ捨て難いものである。

懸崖
絶壁

折から雲低く垂れて懸崖に雨を呼び、たま／＼閑寂なる鳥の音を聞く。霧は嶺に迷ひ、煙雨絲の如く、幾重疊の峰をつゝむ。時雨ならば猿も啼くべし。

檜の葉を幾倍した形で、大きな五葉より成る野草が、そこいらを埋めてゐる。如何にも怪奇的な葉である。厚く、ごす黒く、觸らば棘を感じずるであらう。案内の男に訊ねると、ゴハだこいふ。



—— 上 高 地 (山元春筆) ——

淙々
潺々

ある時は道に岩魚釣る男の下り來るに逢ふ。ある時は登山靴を背負ひ、天幕をかつぎ、岩のやうな靴をはき、日焼した顔の頼もしい青年たちの、黙々として山を下るに逢ふ。ゆきかふ人は、或は黙禮し、或は短い挨拶をして通り過ぎる。山を歩む人々のなつかしい美しい習慣である。

小粒の雨はやがて驟雨となり、溪を隔てたばかりの懸崖をも見失ふ。風さへ加はつて、溪川の凄じい瀬の音と、木をうつ嵐の聲に一鳥啼かず。

溪の到るところ山氣凝つて淙々の聲を聞く。極樂水、涼澤等に佇んでは眞清水をくむ。極樂水の名に恥ぢぬ山中の醍醐味、いひつくしがたし。

飛瀑は霧と化して河心の巨巖を包んでゐる。巖頭に石楠の霧を浴びて白日夢のごとく咲いてゐるのを見る。柚人たちの小屋

薄暮
黄昏

を通り過ぎて岩魚留の茶屋に憩ふ頃から再び雨は激しく、日は暮れかゝつて來た。

つたうるしの花の雪の如く、また、びの葉のやゝ紅らんだのが美しく山を飾つてゐる。薄暮の山徑はしばしば雨に途絶えてしまふ。徳本峠まではなほ一里。風はますます荒れる。

徳本峠は海拔七千百尺、上高地よりする登山者にとつて、日本アルプス第一の關門である。日さへあらば、天氣さへよくば、上高地の溪谷を隔てて直ちに穂高の靈峰と面接すべく、恐らく穂高展望の隨一なるものであらうに、日は暮れ、嵐は樹をうつ。

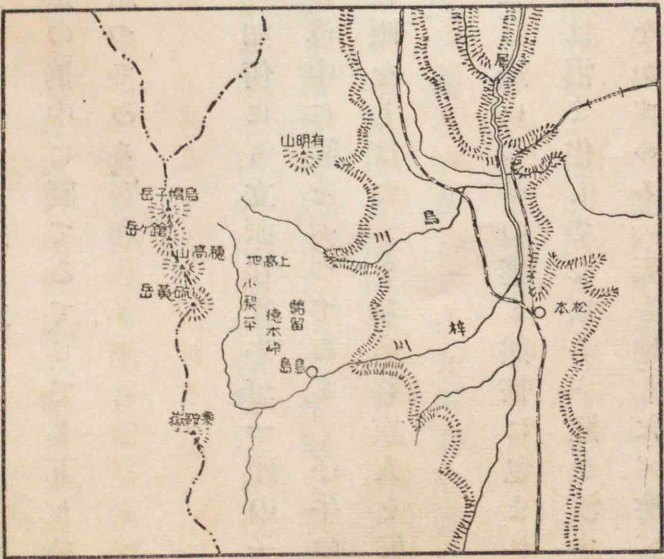
峠の茶屋の戸を排して中に入れば、既に五六人の學生たちは、毛布を被つて寝に就かうとしてゐる。雨を防ぐために被つて來た油紙は破れ、肌は雨に打たれて寒さにわななく。シャツを取りかへ、冬の外套を着て、少憩の後、山を下る。

夕闇
曉闇

日は暮れたが、まだ道はほの白く見える。雪溪は杳然として道に沿ひ夕闇のなかに流れてゐる。

山を下るにつれて木立深く、道はやがて爪先をも辨じがたくなる。雨の中に提灯を點じて道を拾ふ。雨具の下に辛うじて燭を勞り守る。幾度か灯を消しては嵐の中に立迷ふ。道に沿うた雪溪のみが、闇の中にたゞくしく浮ぶ。

下つて行く溪の方の霧の中から俄かに二三點の灯が見出され



上高地附近

た。旅館五千尺からの迎への灯ではないか、などと語りながら、灯を目あてに下つて行く。五六人の若い人達が立ちどまつてゐて、「大きな牛が數頭この下の道の真中に寝てゐて、とても下りて行けぬから、峠まで引返さうと思つてゐる。」
 といふ。

私達は山を下つて行つた。如何にも立派な乳牛が、一頭の子牛をつれて、嵐の中に悠々と道の真中に寝そべつてゐる。子牛の頭を撫でてやれば、雨にうたれた眼をしばた、きながら、旅人を仰ぎ見る。

間もなく道は平坦になつた。廣いつはの葉と熊笹に包まれたぬかるみの道を急ぐほどに、道は沼と化してしば／＼脛を没する。野兎が道を横ぎつて提灯の灯をかすめる。天も地もたゞ晦冥。山も見えず空も見えない。恐らく私達は五六千尺の深い霧の海

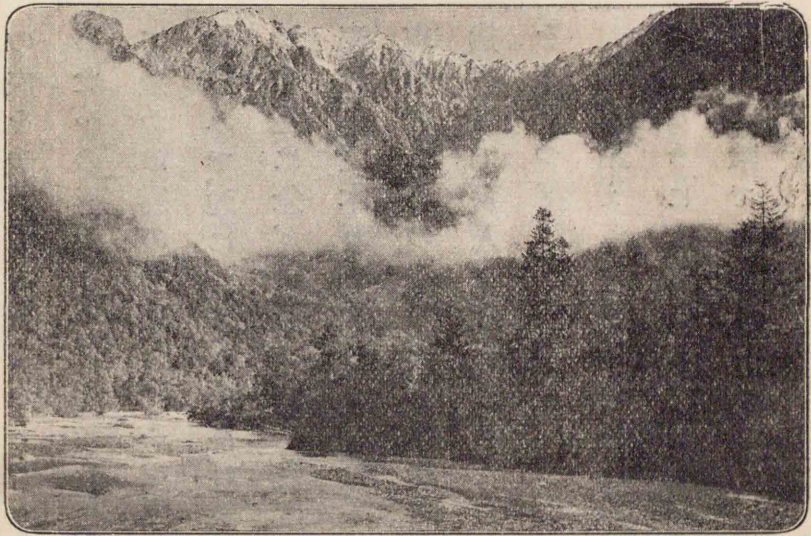
晦冥
清明

の底を歩いてゐるのであらう。ふりかへれば、後からついて來てゐたかの五六人の登山者たちは、いつの間にか遠ざかつてしまつて、遙かの霧の中にたゞ一度夢の如く描き出された灯影を見出したのみで、遂に灯影を失ひ、聲を失つてしまつた。

私達は急ぎに急いだ。幾度か燭をかざしては丸木橋を渡つた。濁流は丸木橋を沈めてゐた。その間にも山の男たちは、山案内の喜作爺がその子と共に雪崩にうたれて死んだこと、乗鞍の牧場に熊が出て、番人を食ひ殺したことなど、いかにも山の物語らしい事を話しつゞける。

燭が消える。嵐は溪に狂ふ。たゞ嵐の聲のみである。関さして聲なきにもまさる山のわびしさは、嵐の夜の嵐の吐息する間の山の沈黙であらう。樹によりては冷たい雨を避けつゝ、嵐の底の死靜に耳を傾ける。

キャンプ
Camp
テント
Tent



上高地

靴には水が溢れ、背には冷たい雨が流れこむ。着かへたばかりのシャツもぐつしよりになる。まよ、道あるも道なきも構ふことかは。快く雨にうたれつゝ、草を分け樹の下をくぐる。

霧の中に二つ三つ四つとまぼろしのやうな灯が瞬きはじめる。若い人たちのキヤムプである。小梨平の柔かな草の上には、若い人たちの美しい夢を守る幾十のテントが、寂然と

して嵐の中に横たはつてゐる。

上高地の嵐の夜は、若い人々の静かなテントを漏れてくる灯によつて、いかに尊くせられ、懐かしくせられてゐるか知れない。若い人達よ。君等こそ人生の最も尊いまぼろしに生きてゐるのだ。君等こそ天上へのあこがれを如實に生きてゐるのだ。たゞ一本の蠟燭、一個の飯盒、一枚の毛布、一挺の手斧。君等はまさに哲人の生活を生きてゐるのだ。小梨平の柔かな草の中に、君等のテントを漏れてくる一本の蠟燭の灯を見る時、上高地の夜が、如何に尊く清くせらるゝことであらう。君等の草の中のキヤムプの灯は、聖火の如く静かである。

夜十時、上高地の旅宿「五千尺」に着く。

旅宿「五千尺」は、六百山の懸崖を背にし、梓川を隔てて直ちに穂高に對してゐる。

裏の小暗い湯槽に浸り、靜かに恐ろしい嵐を聽く。
 燭は暗く、笕の水は氷の如く冷たい。如何にも山寺のやうな建物の感じである。部屋々々のランプの灯の薄暗いのも、山の宿らしいなつかしき感じをわかせる。
 食膳に供へられた尺にも餘る岩魚の鹽焼のうれしさは、いまだに忘れられない。

幾度か眼を覺ましては、硝子窓ごしに空を見た。星一つなかつた。たゞ凄しい嵐の聲と瀬の音のみ夜つびて狂ひに狂ふ。
 (日本新八景)

一三 登臨賦

島崎藤村

島崎藤村
 名は春樹、
 野縣の人、
 學者。文長

高根に登りまなじりを
 きはめて望み眺むれば

わがゆくさきの山河は
 目にも朗らに見ゆるかな
 みそらを凌ぐ雲のみね
 くだけて速く青に入る

こゞしく奇しき磐が根の
 つらなりわたる山脈は
 海にきほへる高潮の
 驚き亂れ湧くごとく
 大山祇もゆるぎ出で
 わがたましひを奪ふかな

大山祇
 山の神

誰かは譏り誰が恨む

翅をのべしはやぶさは

虚しき天の戸を衝きて

高きみ空にかけれども

打振りうちふる羽袖だに

引きとむべき雲もなし

遠く緑におほはれて

望をつむむ野の方に

ひがしに下る河波の

ゆくへを見れば紫の

山の麓をうちひたし

溜々として流れ去る

あゝ大空に風吹けば

雲おのづから舞ふ如く

迷ひの霧にこめられし

暗き谷間をあゆみ出で

高根にあれば時を得て

はるかに揚がるわが心

顧みすれば越えてこし

山はうしろに落入りて

荒れにし森の影もなく

寂しき野邊も見えわかず
日の照らすとも七重八重
わが故郷は雲にかくれて (藤村詩集)

キヤムピン
グ

Camping.

茂木慎雄
栃木縣の人、
東京鐵道局
員。

一四 キヤムピング

茂木 慎雄

美しき神祕に充滿した自然界に暫くあなたの眼を向けて
御覽なさい。

樹は新緑の冠を捧げて塔の如く峙ち、花は無限の優しさを以てその脚下を飾つて居ります。柔い毛皮と美しい羽毛の上衣をつけた侏儒達は、樹下石上で嬉戯してをります。泉は滾々として珠玉を吐き、吹く風は肌を涼しく、百合薫

象徴
表徴



赤城山大沼湖畔キヤムピング場

る小徑は、手をひろげて徒歩主義者を歓迎してゐるではありませんか。

紫外線を多分に含んだ自然界の太陽は、そこに入込んで來る人々に、健康を贈物とする事を忘れません。夜の大空は、衆星の瞬く光に莊嚴化されて、永遠そのものを象徴して居るやうであります。

彼方では郭公・牡鹿・木兔の類

が、彼等の楽しい生活の歌で、澱んだ森林の空気を震はせてをります。此方では白樺の焚火を圍んだ青年たちが、キヤムブの一夜を色讀してゐます。

あッ、月が出た。溪流の彼方から團々として三五夜中の大きな月が上つて來たではありませんか。

野にも山にも川にも湖にも、梢にも岩角にも谿底にも、満ち溢れ満ち渡つてゐる自然界のさゝやきが、あなた方の耳には聞えないのでせうか。天地宇宙の間に満ち渡つてゐる超自然者の大説法の聲が、あなた方の耳には觸れないのでありませうか。

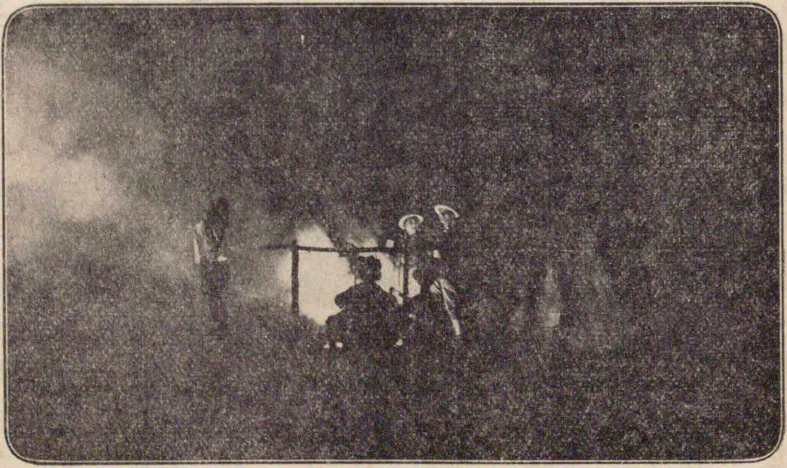
小鳥はそれを知つてゐます。栗鼠や兎はそれに耳を傾

ませうか

けます。ひっそり人間だけが、それに聽入らうともいたしません。

一張のテントを水のほとりに張つて、楽しい夕餉が終つた後、キヤムブ・フアイヤーの此方に坐つて、靜かに休息する時、靜寂そのもののやうな森林の一夜に、自然界の神祕なささやきが、あなたの胸の奥に入りこんで行く事と信じます。

キヤムブ
フアイヤー
Camp Fire.



キヤムブ・フアイヤー

妙境
佳境

その時です。あなたの心は清められ、渴き切つたあなたの魂は潤ひ、あなたの心身は法悦の妙境に浸るのであります。さうした刹那を出来るだけ長く私たちの裡に保留したいものであります。キヤムピングの妙味はそこにあります。

體讀
味讀

一張のテント、寢具、豫備の衣服、食糧品等を、一包の荷こして背に負ひ、粒々の汗を落しながら、廣い野、峻しい山を跋涉する時、快い労働の妙味も體讀出来るのであります。
鳥獸・蟲魚・草木・蘚苔・山河・風聲・雨韻・零露・溪流・懸泉等、眼に觸れ耳に聞く一切のものを、百年の友と觀じて、彼等の中に入りこんでゆく時、天地創造の昔に住む心境も得られること

ご存じます。

芭蕉
姓は松尾、元
禄時代の俳
人。

西行
鎌倉時代の歌
僧。

平凡
奇抜

緑の野原から森林の奥へ、森林の奥から水の源へ、水の源から高山を極め、更に緑の野に下り、美しい湖水のほとりに行くといふやうなキヤムピングの旅を續ける時、芭蕉の境地も西行の心境も坐るに肯けるではありませんか。
緑草を逐うて轉々した遊牧の民の自由さ、何物にも拘束せられない大自然裡の彷徨。キヤムプする人のみに、さうした心境が味はれ得るのではないでせうか。
キヤムピングは、都會や家庭で行はれてゐる日常生活を、一時大自然裡に移して行ふに過ぎないもので、別段大した事ではないのであります。然し一見平凡に見受けられる

油然勃然



出 發 準 備

キヤムブの生活を通して、私たちは肉體を鍛へる事も出来ません。精神を淨化し聖化してゆく事も出来ません。
一本の木を切る時、一尾の魚を焼く時、一杯の羹を吸ふ時、一碗の飯を食ふ時、油然として感謝の涙が湧き、神を慕ひ、永遠を懐ふの心が動くのはどうした事でせう。

私は今日キヤムピングに赴

砂を噛む
蠟を嚼む

く人が漫然として行き、茫然として歸つて來られる事を望むものではありません。十分に自分を見つめ、都會の騒音の中で振落して居る自己の姿を、しっかりと把握して歸つて來られる事をお奨めしたいのであります。
一見頗る淡泊に見受けられるキヤムブの中の生活は、決して砂を噛むやうな乾燥無味なものではありません。そこは心身練磨の道場であります。眞言の古聖がお遍路さんを奨励したのも、兩部神道の人達が法螺を吹いて降入をしたのも、キヤムピングに言説を絶した一味の妙境が存するからであります。

簡易な食事、清新な空氣、十分な運動と快い睡眠。健康と

幸福を作りに出すキヤムピングは、疲れたる我が國民的元氣を沸きたゝせる上に於ても、吾々のせねばならない一種の義務であるご申しても過言でないご思ひます。

(キヤムピング)

一五 鹽原

尾崎紅葉



尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客はかはれど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひこりに倦み疲れつゝ、はじめ、西那須野の驛に下車せり。

直ちに、西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野ヶ原に入

尾崎紅葉 名は徳太郎、東京の人、名高き小説家、明治三十六年歿、年三十六。 鹽原 栃木縣那須郡にあり、西那須野より五里、碓氷川に沿ひて處々部落をなす、温泉多し。 西那須野 栃木縣那須郡。

幽草 幽芳

れば、天は闊く、地は遐かに、たゞ、平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞ見えて、行くほどに、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に、淙々の響ありて、これに架れるを入勝橋となす。

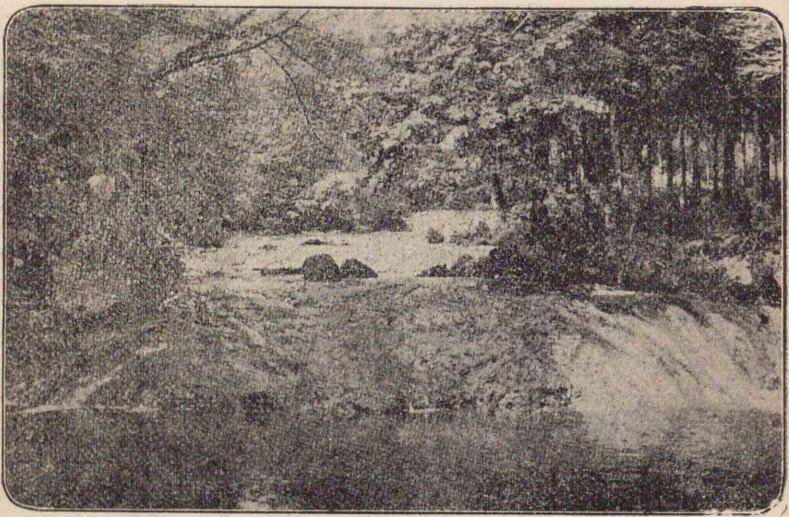
橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹、聲々の鳥啼き、前には、幽草、歩々の花をひらき、愈登れば、遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は、淺く見はれて、すはやこゝに、空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかご、すさまじかり。道の右は山を剷りて長壁となし、谷幽に、蘚碧にして、幾條こ

たる躑躅・山藤などうち眺めつゝ行くほどに、鹽釜の湯・甘湯澤・小太郎ヶ淵などはやくも過ぎて、いつか畑下戸の里に着きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。こゝに、清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯すれば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に満ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山また山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。

望臨

恍然
恍惚



小 太 郎 が 淵

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び肉消して、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然として、すべて忘れたり。
まここに、よくこそ、我は來つれ。何ぞ來る事の甚だ遅かりし。山の麗しといふも

齒牙に懸け
ず念頭に措か
ず

壤の堆きのみ、川の暢けしこいふも水の逝くに過ぎざるの
み。牢として抜くべからざる我が半生の痼疾は、いかでか
壤と水との醫すべきものならんご、齒牙にも懸けず侮りた
りしおのれこそ、まづ侮らるべき愚の者なれや。
見よく、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、
そばだつ巖も、吹來る風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、
皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲を
忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と軽く、心はこの水と
淡し。希はくは、今よりかくの如くにして我が生を終へん
かな。(紅葉全集)

藤村作
文學博士、東
京帝國大學教
授

蜀山人
太田翠。蜀山
人はその號、
又南畝、四方
赤良と號す、
徳川幕府の士
にして文學士
者、文政六年
(約百年前)
年七十五歿

一六 文學の遊戯

藤村 作

狂歌はその起原に遡れば平安朝時代からあるけれども、
時代の生活と密接して、本當に流行したのは徳川時代のこ
こである。江戸狂歌の性質は畢竟洒落な遊戯文學といふ
所にある。しかも其の大多數は言語の遊戯から出來てゐ
る。蜀山人の狂歌に例をすれば、春霞立ちくたびれて武藏
野のはら一杯に延ばす日の脚といふが如き、全く言語の洒
落、言葉の遊戯である。それから古歌のもちりも甚だ多い。
このもちりの狂歌は、古歌の持つてゐる嚴肅な、上品な、優美
な趣を變化して、これをふざけた、粗野な、卑近なものにして

大江千里の歌
月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとつ秋にはあらねど

しまつて、そこに滑稽を感じさせるのである。例へば小倉百人一首の中にある大江千里の歌を「月見れば千々に芋こそ喰ひたけれわが身ひさりの好きにはあらねど」としてゐる。これらが遊戯文學たることは言ふまでもない。又、中には時勢に觸れたものもある。同じ蜀山人の「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶこいうて夜も寝られずは寛政の改革として知られてゐる松平定信の文武二道の獎勵に關するものである。嚴肅な政治上の改革沙汰を愚弄したのであるが、作者の態度を推せば、單にふざけた遊戯的の文學であつたといふに過ぎない。(上方文學と江戸文學)

唐衣橘洲

本名小島泰從、江戸の人、享和二年(約一八〇一年)歿、年六十。

四方赤良

蜀山人の別號、山人の別號。

鹿都部眞顔

本名北川嘉兵衛、江戸の人、文政十二年(約一八〇一年)歿、年七十。

木端

丸子氏、大阪の人、眞宗僧。

宿屋飯盛

本名石川雅望、江戸の人、國學者、文政十三年(約一八〇二年)歿、年七十八。

鯛屋貞柳

本名榎並善八、大阪の人、享保二十年(約一七九〇年)歿、年八十。

兼もなき膳にあはれは知られけりしぎ焼茄子の

秋の夕暮

唐衣橘洲

時鳥啼きつるかたにあきれたる後徳大寺のあり

あけの顔

四方赤良

早蕨がにぎり拳をふり上げて山のよこづらはる

風ぞ吹く

鹿都部眞顔

世の中は何のへちまと思へどもぶらりとしては

暮らされもせず

木端

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはた

まるものかは

宿屋飯盛

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれけれどもく

さうぢやけれども

鯛屋貞柳

頭光 本名岸誠之、江戸の人、寛政八年(約一三〇年前)歿、年七十。

ほとゝぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里 頭 光

本山荻舟

名は仲造、岡山縣の人、報知新聞記者。駿河臺 東京市神田區にある高臺。

一七 蜀山と一九 本山荻舟

駿河臺の蜀山人の家へ、ぶらりと訪ねて来た客があつた。

「先生は御在宿でげすか。」

「ごなた様で。」

「手前は十返舎一九と申します。まだお目に懸つた事はございませんが、御高名を慕つてお訪ね申しました。宜しくお取次を願ひます。」

「暫くお待ち下さい。」

さいつて奥へ入つた立關番は、すぐ引返して来て、

「どうぞこちらへ。」

と丁寧な客間へ通した。客間さいつても貧乏御家人の家で、無論立派な座敷ではないが、主人の好みで、簡素の中にも何となく床しい趣は見えてゐた。

「主人は只今、少々手放しかねる用事を致して居りまするので、失禮ながら暫くこれでお待受を願ひたうございます。」

「御丁寧な御挨拶で痛み入ります。どうぞせ遊んで居りますから、決してお構ひなく、御ゆるりと御用をお済ましなさるやう、どうぞ御傳へ下さいまし。」

初見參の家であるから、一九も謹んでかしまつて居た。さて暫く神妙にして待つてゐたけれど、主人は容易に出て來なかつた。冷えた茶を飲みほしても、もう小半刻にもなる。水が欲しくて堪らなくなつたけれど、案内してくれた立關番も、それきり姿を見せな

願ひたう。

整然



羅ふん

いので、始めて来た家で手を鳴らして人を呼ぶ事もならず、かしこまつた膝に痺痺をきらして居ると、身柱みはしらからぢり／＼して来た。やがて又半刻経つたけれど、まだ次の間に人の氣配も聞えないので、一九はさう／＼持前の癩癩玉を破裂させた。「何だ、南畝々々つて先生扱にしてやれば増長して、人を馬鹿にしてゐる。多寡が貧乏御家人ぢやないか。先生が聞いて呆れる。散々毒口を吐きながら、ぶん／＼怒つて歸つてしまつた。

むしやくしやしなながらも家に歸つた一九は、そのまゝ書齋に入つた。書齋の中は、机・本箱・書籍・筆硯、雜然として、その間に取散らされた杯盤もそのまゝ、前夜の褥が敷きつ放しで、枕は遠くに轉つて

ゐる。縦横狼藉、殆ど足の踏みどころもない。一九は平然とその中に坐つて、先づ水差の水をぐく／＼と飲んだ。彼はいつでもこの雜然たる室内で物を書いた。そして書いてゐる間は、家人と雖も厳しく禁じて、一步も室に入ること

を許さなかつた。

折角訪ねた南畝に侮られたと思つて、ぶり／＼して家に歸つた一九は、その後間もなく、或參會の席で、ゆくりなくも南畝と顔を合せた。

初めてお目にかゝります。手前が



九一合返十

一九ですが、先生餘り人を馬鹿にしちや困りますぜ。」

中つ腹の上に、豫て酒癖のよくない一九が目を据ゑた。蜀山の方は先輩でも年上でもあるから、穩かににこ／＼しながら、

据ゑた

逢ひたい。

「は、あ貴公が十返舎か。さういはれると、貴公こそあまり老人をなぶり物にしては困るね。」

「え、手前がいつ先生をなぶり物にしたか存じませんが、とにかく折角訪ねて行つた者に、待ちぼけを食はせるなんぞは酷うございませよ。」

「そこだて。私の方では又貴公のお名前はとうから聞いて知つてゐたし、豫て一度逢ひたいと思つてゐた所へ、幸の御來訪を得たといふわけで、何はなくとも緩々飲みながら話したいと思つてな、懷を押へて見ると、お恥かしい話だが、御存じの貧乏御家人で、生憎囊中無一物だつた。それでは、」

一九の方が頭を搔いた。蜀山はあり合せた杯をさしながら、「所で思ひ付いたのは、庭に一本桐の木があつた。可なり大きくなつてゐたので、近處の下駄屋から、度々賣れ、」とせがまれてゐ

た。これ幸と賣飛ばして、若干の錢が入つたので、早速酒屋へ使を走らせて、さて座敷へ歸つて見ると、折角面會を樂しんだ貴公は影も見えぬではないか。若い者は氣が早い。仕方がないから、買つて來させた酒は一人で飲んでしまつたよ。は、桐の木一本ふいにした。何と恨ではあるまいか。これには流石の一九も一言もなかつた。かくて二人は親密になつて、口の悪い一九も蜀山の事は常に先生々々立ててゐた。

蜀山は初め牛込二十騎町に住んだが、中頃小日向金剛寺下に移り、後、駿河臺太田姫稻荷の向うに轉じた。恐らく聖堂へ勤めるやうになつてからだらう。その頃の狂歌に、

雪は鷺毛に似て飛んで散亂するが臺
ちんぷんかん田聖堂の屋根
といふのがある。蜀山は致仕の後十年、悠々餘生を樂しんで、文政

小日向

小石川區。

聖堂

本郷區湯島の
昌平覺。

雪は云々

雪似鷺毛ニ飛
散亂、人被ニ鶴
聲立徘徊。
(白居易)

六年四月、七十五歳を以て歿した。辭世は、

時鳥鳴きつるかたみ初松魚

春と夏の入りあひの鐘

白山

小石川區。

墓は白山本念寺にある。

臨終
終焉

一九は後れて天保二年八月、行年六十八歳で歿した。一説には五十七歳とも傳へられる。彼は臨終の枕元に門人を呼んで、俺が死んでも湯灌には及ばぬ。著物もこのまゝ、棺に入れて、死骸は必ず火葬にしてくれ。といひ置いて息を引取つた。門人は遺言どほり帯も解かず、そつくり火葬場へ持込むと、いよゝゝ火をかけるに及んで、凄じい爆音と共に棺の中から幾條もの火柱が八方へ迸り出た。何事が起つたか、立會つた者は皆色を失つたが、よく調べて見ると懷中に花火の管を入れてゐた事が判つた。とは有名な話である。死んだ後まで人を馬鹿にした一九の辭世は、

この世をばごりやお暇にせん香の

けむりごころにはい左様なら

といふのであつた。遺骨は淺草善龍寺地中東陽院に葬つた。

(名人崎人)

姉崎嘲風

名は正治、京都の人。文學博士、東京帝國大學教授。

高山樗牛

名は林次郎、山形縣鶴岡の人。文學博士、明治三十五年(一九二四)年三月に歿した。この書は明治三十五年八月十七日附に當時ロンドンにありし姉崎嘲風に贈りしものなり。

清見潟

靜岡縣庵原郡、興津南方の海岸。



高山樗牛

一八 姉崎嘲風に寄する書

高山樗牛

鎌倉に移り越し候うてより、早や一年にも間近くなりぬ。

東京へは、去年の暮このかた一度も行かず、人にも世にも日に疎く相成申候。此の地も思ひの外の俗地にて、吾等が如きものの永く往まるべき所には非ざるにや。

此の頃は駿河灣清見潟の風光寤寐の間に往來致し、曾遊の感

吐いて

臨風
笹川種郎、東
京の人、文學
博士



姉崎嘲風

興今更の如く思ひ出され申候。何れこの秋頃には、かの地の客とならんかと存じ居り候。病に罹りてより口に酒盃を接けず、この世ながら禪房の中に等し。あゝ、人生此の如くにして何によりてか行樂せん。吾嘗て君に云ひ送りぬ。君還り來まさば、願はくば一夕清見瀉の海樓に痛飲し、其の夜満腔の血一斗を吐いて死なんと。君よ、この語矯に似て矯に非ず。吾は時として眞に此の如く思ふ事あるなり。

過ぐる頃、臨風宇都宮より三葉の新紙を送り越し候ひしが、開き見れば、令弟潔君が主筆たる松陽新報にして、中に君が潔君に與へし私信を掲載しありき。吾は君

の此の私信を讀みて、一種の感愴に打たるゝを禁する能はざりき。

君は此の書の末に我が事に言ひ及び、かの清見瀉に快飲して満腔の血一斗云々の我が言葉を引きて、嗚呼これ病に苦しめる隣れむべき我が友の聲ぞかし。予は此の友の顔を、或は此の世にて見得ざるべきかを思へば、斷腸の思ひに勝へず。と書き給へりき。あゝ、我が友よ、君も然か思ひ給ふか。今日まで君に明らさまに言ひしことは無けれども、吾も亦是の如く思うて日夕憂苦しつゝありしなり。唯幸にして病をほ太だ重からず、力めて生を養ひ神を勵まさば、なほ殘生の、君と共に樂しむべきものあらんか。唯旦暮藥餌に親しみて、坐卧すべて意の如くならず。是の如くにして、よしや百歳の壽を保つ

思うて

とも、一夕の歡會にも價せざるを念ふと雖も、尚且此の生の戀戀として捨てがたきものあるを覺ゆるぞ是非も無き。君よ弱きはげに人の心なりき。

同じうして

忘れもせず、三年以前の八月二十二日の事なりき。君と臨風と吾と船を同じうして遊び暮らし、扇が浦の一夜をば。あゝ此の三たりの友の相會して斯かる遊びを再びすること、此の世にて望み得べきこと

孤子おれを罪を責め
況んや此の世の一篇を
のけりては流るる水と
しんじりては遠上人の
境、推しおれを責め
地極位其日暹研究
懐き了る事なきを
上人、君よ、君よ、
此の世に望み得べきこと
是れは、此の世に望み得べきこと
是人、此の世に望み得べきこと
的、英雄、此の世に望み得べきこと
り、此の世に望み得べきこと
り、此の世に望み得べきこと

讀 筆 牛 柳

野州
下野。臨風時
に宇都宮中學
校長たり。

なるか。今や臨風野州に下りて、吾は湘南に客となりぬ。彼は身世の匆劇に處して悠遊の暇を得難く、吾は病軀を擁して動き難し。あゝ吾何によりてか此の磊塊を放蕩せん。來らん年の秋には君歸り來まさんも、かゝる歡會の再びし難く往時の忘れ難きを思へば、轉た人生遭逢のはかなきを傷まさんばあらざるなり。あゝ君よ、笑ひ給ふなかれ。弱きはげに人の心なるを。(文は人なり)

○
ちつと對ひ合つて、何を語ることとてもないので、いつまでも黙つてゐる。それでゐて互の心の中は、丁度自分の心と同じやうによくわかつてゐる。一つの眼つき、一つの微笑で、その心持をあらはすには十分なのだ。

こんな友達があつたなら、どんなに幸福な事であらう。互に信じ合

ひ、互に愛し合つて、一點の疑もその間に介在しない友達が一人でもあれば、私達は二重に人生を生きることが出来るのだ。たゞ自分ばかりでなく、友達によつても生きることが出来るのだ。
(生田春月)

一九 伊藤公を弔す



伊藤博文

明治四十二年十月二十六

日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙撃する所となり、暴かに清國吉林省哈爾賓驛に薨ず。嗚呼、哀しい哉。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も、予君と交る五十餘年、異體同心、生死患難を共にし、國歩艱難の秋に始り太

患難
艱難

垂死
瀕死

文久癸亥
文久三年

高杉
晋作、東行と
號す、松陰の
門人。

平富貴の日に至り、始終渝ること莫く、金石も管ならず、自ら謂ふ、交友の誼、今古に愧づる無し。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君予の垂死を哭するここ二回。予幸に君の交情看護に因つて再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼、哀しい哉。

回顧すれば四十七年前、文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤、海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し、潜かに泰西に航し、居る事僅に半年餘、馬關・鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に歸り、首として開國を唱へ、故國を危難より脱せしむ。内訌尋いで起り、予は暗夜要撃に遭うて殆ど死し、君は高杉を助け

木戸 木戸孝允、長松
 菊と號す、
 州萩の藩士、
 維新の功臣、
 明治十年薨、
 年四十四。
 大久保 大久保利通、
 甲東と號す、
 鹿兒島の藩士、
 維新の功臣、
 明治十一年薨、
 明客に斃る、
 四十八年。

王臣匪躬 王臣蹇々、匪躬
 躬之故。(易經)

て兵を擧げ、藩論を回復し、我が一大危機を轉過せり。己にして王政復古、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、君木戸・大久保二公を佐けて最も力あり。維新の績、これよりして破竹の如し。進取の宏謨を翼賛し、維新の大業を成就す。勅を奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、其の他、法律制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり、勳業の盛を極め、首に韓國統監となりて保護の範を立つ。

君、學漢洋を兼ね、識東西に通ず。最も東洋の平和を以て念とし、常に忠節道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の

死去 死去
 薨去 薨去
 崩御 崩御

環球 環球
 渾圓球 渾圓球

表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬里を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。忠君報國の厚きに非ずんば、孰か能く此の如くならん。豈意はんや、君の忠節にして、玆の不測に遭ひ、暴かに異邦の地に薨せんとは。嗚呼、哀しい哉。

君の訃電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟・黃童・織婦・耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王・大統領・大臣・紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才徳勳業を稱讚し、環球著望の盛、振古未だ君の如きに比するあらざるなり。抑、予は又之に因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち

匪以報公
蘇轍の「代三
省祭司馬丞
相文」中の
句。

井上馨

蘇轍の「代三
省祭司馬丞
相文」中の句。

宜しく舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに努め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ、匪以報公、維以報國、死者復生、信我此言。庶はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼、哀しい哉。

老友 侯爵 井上馨

志ヲ立テテ奮勵王政ノ復古ヲ唱ヘ難ヲ排シテ邁往宏猷ヲ維新ニ贊ケ憲法ヲ草創シテ刊ラザルノ典ヲ修メ韓國ヲ指導シテ渝ルコトナキノ盟ヲ締ビ股肱之レ倚リ柱石之レニ任ジ忠貞君ニ奉ジテ公正事ニ當リ勳績倍々顯レテ望一世ニ隆シ忽チ訃音ニ接ス曷ゾ軫悼ニ勝ヘン茲ニ侍臣ヲ遣シ賻ヲ齎シテ以テ弔慰セシム (誄詞)

二〇 漢字の構成

蒼頡
黃帝の臣。

昔支那に蒼頡といふ人があつて、鳥や獸の足跡を見てから思付き、色々の畫を書いて文字を作つたと言傳へられてゐる。漢字が畫から出來たといふことは、一見しては分らぬが、注意して見るに成程さうなづかれる。例へば日が☉、月が☾、山がⓂ、川が川、木が木、竹が竹、弓が弓、矢が矢、鳥が鳥、魚が魚から出來たといふやうなのがそれである。ところで鼠の字になるにちよつと難しい。鼠は物を齧るから口と齒、走るに早いから足、それと長い尾、この三特徴を合せて鼠とした。人の指と腕を象つた手又は才が出來、こ

特長
特徴

象形文字

の手で物をつかむ形の爪から爪の字が出来た。瓜は蔓に「うり」の生つた形の瓜から出来た字。故に爪にツメなく瓜にツメがあるのである。門が門となり、この門の左半分が戸の字となる。それは木を半分に裂いて、右半分が片即ち片の字となると同じ理である。斯様に物の形を象つて作つたのを象形文字といふ。

形のある物は形を象ればよいが、無形の道理や事柄は上述の象形文字を本として、之に符號をつけたり、又は之を變化して文字を作つた。例へば水平線の一を引いて、その上や下に・又は一をつけて、上又は上として「うへ」、下につけて「下」又は下として「した」の意をきめる。木の「も」に一を

指事文字

アルハベツト
A. phab. t.

引いて本「すゑ」に引いて末とし、月が半ば山の端に昇つた頃が「ゆうへ」であるといふ意から、月を半分書いて夕とする、或は又「からす」は色が黒く、遠見では目の有無がわからぬ鳥だといふので、鳥の字の目を除いて鳥と書くといふ風に、理窟をつけて、其の事柄を指し示すから、此等の字を指事文字といふ。此の象形と指事との二種が漢字のアルハベツトとなつて、更に數萬の字が組立てられるのである。

象形・指事の二法によつて作られた所謂アルハベツトの組合せ方に、又二種ある。第一は、

炎 はのほ 赫 かきやく 林 はやし 晶 あきらか 轟 とどろく

といふ風に、同じ字を二つ以上組合せたり、又一を地平線と

會意文字

見て、この上に日を書いて且あしたとし、その日が次第に昇つて木にかゝつたのを東ひがしとする。口と鳥とを合せて鳴、牛と角と刀とで解剖の解の字とする。此のやうに二つ又は二つ以上の文字の意味と意味とを會あはせて造つた文字を會意文字と名づける。我國で作つた榭・榭・胤・胤・風・風・畠・糝・襍・俾・俾・脛等の字は皆會意文字である。

第二は、二つ以上の文字を會はす時に、一方に意味を取つて、一方に音を取る方法である。丁度子供の繪本に、繪に振假名をして其の名を表はしたのと同じやり方である。



形聲文字

の如く付・里・周・堅・崔・奚・卑・九等は、その魚や鳥の名で、我が國の振假名に當る。この振假名がその文字の音聲を表はし、魚や鳥は象形で意味を表はしてゐるから、此等の字を形聲文字といふ。漢字の十中七八は、形聲文字であるから、この理を辨へてゐれば、読み書きの上に誤を防ぐことが出來て便利である。試みに次のやうに列べて比較して見ると、紛らはしい文字の區別が明瞭に分るであらう。

段 <small>ダン</small> の音	段 <small>ダン</small> の音	且 <small>シヨ</small> の音
葭 <small>カ</small> ・霞 <small>カ</small> ・假 <small>カ</small> ・暇 <small>カ</small> ・瑕 <small>カ</small> ・緞 <small>ダン</small>	但 <small>ダン</small> ・坦 <small>ダン</small> ・担 <small>ダン</small> ・胆 <small>ダン</small> ・疸 <small>ダン</small> ・袒 <small>ダン</small> ・壇 <small>ダン</small> ・檀 <small>ダン</small>	祖 <small>シヨ</small> ・租 <small>シヨ</small> ・咀 <small>シヨ</small> ・狙 <small>シヨ</small> ・疽 <small>シヨ</small> ・粗 <small>シヨ</small> ・狙 <small>シヨ</small> ・阻 <small>シヨ</small> ・阻 <small>シヨ</small> ・助 <small>シヨ</small> ・查 <small>シヨ</small>

轉注法

以上象形・指事の二法で漢字の根本を作り、會意・形聲の二法によつて組合せ、文字數萬を作つても猶不足する爲に、今度は便宜上既成の文字の意味を轉じて、他の意味に流用する。之を轉注法といふ。金かねといふ字を貨幣・黄金・堅固・武器などの義に用ひ、首くびの字をかみ・をさ・はじめ・まうす等の意味に用ひるのがそれである。此の外に今一つ地名や人名や其他のものに、之と同音の漢字を勝手に借りて來て用ひる法がある。例へばドイツ・イタリ・ロンドン・ナポレオン・シヤカ・キリストといふのに、獨逸・伊太利・倫敦・奈破烈翁・釋迦・基督と書く類である。此等の漢字は假りにその音にあてはめて用ひるものであるから之を假借法といふ。

假借法

以上六種の中で象形・指事・會意・形聲の四種は、文字作製の原理を説き、轉注・假借の二法は前の四種によつて作られた文字の流用法を説いたものである。そして此の六種を總稱して漢字の六書といふ。

二二 澄江堂隨筆

芥川龍之介



天才てんたいとは僅かに吾々われらが一步を隔てた者まへのことである。只この一步を理解する爲には、百里の半ばを九十九里とする超數學を知らなければならぬ。

芥川龍之介
東京市の人、
文章家、昭和
二年歿、年三
十七。澄江堂
はその雅號。

民衆
大衆

天才とは僅かに吾々より一步を隔てた者のことである。
×
同時代は常にこの一步の千里であることを理解しない。
後代は又この千里の一步であることに盲目である。同時
代はそのために天才を殺した。後代は又そのために天才
の前に香を焚いてゐる。

民衆の愚を發見するのは、必ずしも誇るに足ることでは
×
ない。が、吾々自身も亦民衆であることを發見するのは、兎
も角も誇るに足ることである。

彼は悪黨になることは出来ても、阿呆になることは出来
×
ない。信じてゐた。が、何年かたつて見ると、少しも悪黨に
なれなかつたばかりか、いつもたゞ阿呆に終始してゐた。

阿呆はいつも彼以外の人々を悉く阿呆と考へてゐる。

人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐることは
稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。

人生は落丁の多い本に似て
×
ゐる。一部を成してゐることは
稱し難い。しかし兎に角一部
を成してゐる。

落丁
錯簡

吾々の自然を愛する所以は、——少くともその所以の一
つは、自然は吾々人間のやうに、妬んだり欺いたりしないか
らである。

x

好人物は、何よりも先に天上の神に似たものである。第
一に歎喜を語るのに好い。第二に不平を訴へるのによい。
第三に——ゐてもゐないでも好い。

吾々はしたいところの出来るものではない。只出来る事
をするものである。これは吾々個人ばかりではない。吾
々の社會も同じことである。恐らくは神も希望どほりに

この世界をつくることは出来なかつたであらう。

(侏儒の言葉)

一一一 白河殿の軍議

新院 崇徳上皇。
齋院の御所 白河殿の中にあり。
左府 左大臣藤原頼長。
白河殿 藤原良房の別業。後、白河天皇の離宮となる。今の平安神宮附近。
父子五人 忠正とその子長盛・忠綱・正頼・通正。
頼憲 源氏。
父子六人 爲義と其の子頼賢・頼仲・爲宗・爲成・爲仲。

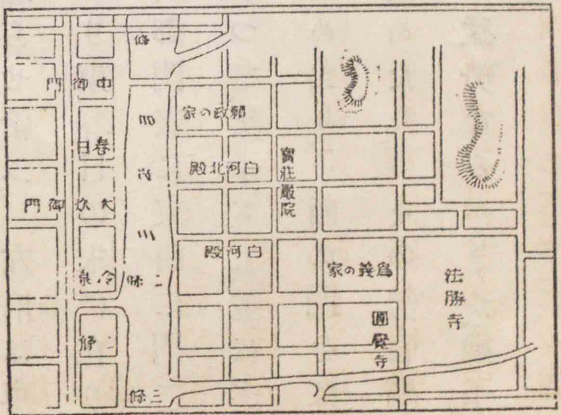
新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて参り給ふ。白河殿より北、河殿より東、春日の末に在りければ、北殿こそ申しける。南の大炊御門表に東西に門二つあり。東の門をば平右馬助忠正承つて、父子五人、並に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて多分は内裏へ参りけり。

とぞ……ける

家弘
平氏。
とぞ……し

茲に鎮西八郎爲朝は、われは親にも連れまじ、兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬ様に、唯一人いかにも強からん方へさし向け給へ。たごひ千騎もあれ萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。ごぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十騎ごぞ聞えし。

抑、爲朝一人ごして殊更大事の門を固めたるごこ、武勇天



下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つきばやの手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くごこ世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなんごて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのごごし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使ご號して筑紫を従へんごしければ、菊池原田をはじめごして、處々に城を構へてたて籠れば、其の儀ならば、いで落して見せん。ごて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者ごして、十三の歳の

香椎宮
官幣大社、
岡市の東一
里。香椎に鎮
す。祭神は仲
哀天皇並に神
功皇后。

こそいけれ
ずれ

三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻め落して、みづから總追捕使におし成つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都にのぼり訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。こ

の儀ならば、我こそいかなる罪科にも行はれんずれ。さて急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき旨申しけれども、大勢にて罷り上らんこそ、上聞穩便ならず。さて、形の如くに附従ふ兵ばかり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鉞打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出で

直垂

八龍
源氏重代の
鎧の一

樊噲 漢の高祖の臣、勇猛の士。
 張良 漢の高祖の臣、智謀の士。
 吳子 名は起、衛の人、兵法の大
 孫子 名は武、齊の人、兵法の大
 養由 楚の人、弓の名手。

高松殿 假内裏、後白河天皇の御所。

たる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始め奉つて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んこと擧り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ。と宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について、大小の合戦數を知らず。中にも、折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること夜討に若くこと候はず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はん、火を

こそ……らめ
 か……べき

掌を反す
 掌を指す

遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈けいでんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして、清盛などがへろへろ、矢何程の事か候べき。鎧の袖にて拂ひ蹴ちらして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿、丁も御輿を捨て、逃去り候はんずらん。其の時爲朝参りむかひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせんこと、掌を反す如くに候へし。主上を迎へ参らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。と、憚る所

南都
奈良。

富家殿
左大臣頼長の
父、忠實の字
治の別邸。

……などか……
……べき……

もなく申したりければ、左府爲朝が申す様、以ての外の荒儀
なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士
軍十騎二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國争に、源
平敷を盡して兩方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべ
からず。其の上南都の衆徒を召さるゝここあり、興福寺の
信實、玄實等、吉野十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者ども
を召具して千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の
見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等待ち調へて合戦をば
致すべし。又明日、院司の公卿殿上人を催さんに、參らざる
者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及
ば、残りなどは參らざるべき。こ仰せられければ、爲朝、上

とぞ……らん

保元物語

三卷、作者未
詳。保元の亂
に關する戰記。

には承服申して、御前を罷立ちてつぶやきけるは、和漢の先
蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士に
こそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計ひ如何あらん。義
朝は武略の奧義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんこ
ぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ吉野法師も奈良大
衆も入るべけれ、只今押寄せて風上に火をかけたらんには、
戦ふごもいかで利あらん。敵勝つに乗る程ならば、誰か一
人安穩なるべき。くちをしきこかな。こそ申しける。
(保元物語)

先づ此の文章の力のある強い調子は、保元の亂第一の大立
者、十五歳にして九州を討ち平らげた餘威に乘じ、武人興隆の

運命を双肩に擔ひつゝ、無位無官の身を以て、滿廷の公卿殿上人と左大臣頼長と崇徳上皇との前にのさばり出でた一代の勇者の面目を寫すに適して居る。此の勇者を寫すに、先づ見上げるばかりの大男であるといふ身體全體の概觀を寫し、次に身體の中で第一に目の附く顔、顔の中で第一に目の附く人間第一の活かし所たる眼の特色を寫し、それから身についた直垂、鎧、太刀、弓、矢、つゞいて身を離れた兜を叙して、樊噲に比べた所が、一絲亂れずに順序が立つて、此の英雄兒の面目を有り有りど眼前に具現せしめて居る事、作者の魂がすつかり爲朝に打込まれて一々の文字が飛躍して居る事などを見逃してはならない。最後に、時代思想の現はれた趣として、當時は公卿の天下が武人の天下にならうとする過渡の時代である。文藝本位の世が武力本位の世にならうとする過渡期で

ある。平安朝のなかば以來、武人は漸次に實力を養つて來たが、彼等は實力が有りながら、まだ公卿の侍者たり、臣僕たり、爪牙たる地位に甘んじて、おとなしく公卿の前に俯伏して居た。彼等が實力を備へながら、それを自覺せずして、藤原氏に仕へてゐた有様は、譬へば睡つた獅子が背の上に雛人形を乗せて居たやうなものであるが、保元平治の大亂は、すつかり獅子をして目を覺まし、背上の人形を振り落させ、やがて武人の天下となつて將軍政治が布かれるやうになつたのである。平安朝四百年の太平の夢が破れて、聽て保元の大亂が起らうといふ其の當夜に、剛勇無雙といひながら、地下チカの中でも無位無官の、而も十七歳の小冠者鎮西八郎爲朝が、左大臣の前に出で、剩へ上皇の御目に懸るさへあるに、其の上皇を始め奉つて、あらゆる公卿殿上人が、八郎頼もしやと拜まぬばかりに首を伸

べて擧つて居るとは、世の中も變つて來たものである。無意識の中に當時の武人を代表してゐた爲朝は、垂れたる首を掲げて、此の様子を見た。彼れは、もう天下は己れのものだと思つたであらう。

「上皇を始めまゐらせ、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとてこぞり給ふ。」簡單ではあるが、公卿の世が武人の世にならうとする大勢推移の消息を力強く暗示して居るではないか。而して此の一寸した四五行數十字の中に、大日本六十餘州の形勢の一變する機微を讀む事は、斯様な文章を讀む者に取つて、最も大いなる喜びであらねばならぬ。私が我が國語國文に於て、時代思想の背景を玩味することの必要を高唱する所以は、こゝにあるのである。

(文の味はひ——五十嵐力)

五十嵐力
國文學者、早
稻田大學教授、
文學博士。

石川啄木

名は一、岩手
縣の人、歌人、
明治四十五年
七月、年二十

二三 ふるさと

石川啄木



ふるさとの

空遠みかも高き屋に

ひこりのぼりて

愁ひてくだる

このごろは母も時々ふるさこのことを言ひ出づ
秋に入れるなり

それごなく郷の事など語り出でて秋の夜に焼く
餅のにはひかな

ふとおもふ古里にゐて日ごききし雀の鳴くを
三ごせ聴かざり

二日前に山の繪見しが今朝になりて俄かに戀し
ふるさこの山

澁民村
岩手縣岩手郡
澁民村、作者
の郷里。

閑古鳥澁民村の山莊をめぐる林のあかつきなつ
かし

かにかくに澁民村はこひしかりおもひ出の山お
もひ出の川

そのむかし小學校の柁屋根にわが投げし鞠いか
にかなりけむ

馬鈴薯のうすむらさきの花にふる雨をおもへり
都のあめに

新しく明日の来るを信ぢといふ
自分の言葉葉に
嘘はなけれど

筆木啄川石

ふるさこの訛なつかし停車場の人ごみの中にそ
を聴きに行く

汽車の窓はるかに北にふるさこの山見えくれば
襟をたゞすも

ふる里の山にむかひていふこごなし古里の山は
ありがたきかも

(石川啄木全集)

後篇

駿臺雑話抄

駿臺雑話に就いて



室鳩巢

駿臺雑話は室鳩巢の隨筆である。
鳩巢名は直清字は師禮、鳩巢は
其の號、萬治元年江戸に生れた。
幼にして穎悟、十四歳の時、加賀侯
に召されて大學を講じたところ、
侯その義理明暢なるに感じ、京都に遊學せしめた。鳩巢乃ち業を木下
順庵に受け、朱子學を主張し、濟々多士の木門に於て、優に重きをなすに

駿臺雑話に就いて

至つた。二十九歳加賀に移る。元祿十五年赤穂遺臣の仇を復するや、學者の間、頗る異論あり、鳩巢慨然として義人録を著はし、人臣の儀則を明かにした。蓋し四十七士を以て義士とするは、鳩巢に始まる。正徳元年、五十四歳の時、新井白石の薦によつて幕府の儒官となり、邸を江戸の駿河臺に賜ふ。これより世人稱して駿臺先生といふ。吉宗、將軍となるや、擢てられて侍講となり、政事の諮詢に對へ、又屢、書を著はして獻じた。晩年、病を以て駿臺の邸に家居し、専ら靜養につとめたが、その病間、門人子弟と講論する所を叙述して一篇を成したも、即ち駿臺雜話五卷である。享保十九年を以て歿す、年七十七。

鳩巢人と爲り忠信にして篤敬、幕府の信任殊に厚く、又大いに學界の推重する所となつた。嘗に經學文章に於て、一代の大儒たるのみならず、詩を善くし、歌を詠じ、又頗る國文に長じた。就中駿臺雜話は、種々の逸話談片を取り來つて、政治、經義、文學、人物を論評し、行文雅健にして流暢、尤もその文才を見るべきものである。

一 愚公が山

翁が心に知己を一世に求むるにも候はず。昔より邪僻妄誕にして、根もなき事のさかんに世に行はれて、あなかしがましく聞ゆるは、女郎花の一時こや申すべき、大方はつゞかぬものにこそ、世を歴て正道へかへらぬはなし。然るを心短くして、早くその驗を見んと思ふは未練のこごこいふべし。諸君、列子が書を見給へりや。愚公こいひし人ありけるが、家居ちかく山のありしをいごひて、わきへ移さんこて、日々に子供引具し出でつゝ、手づから耒耜をこりて、一簣づつこぼちこりけるを、智叟こいひし人之を見て、かく大なる山を、僅かなる人の力にてこぼてばこてこぼち盡さるべきかこ、そのおろかさを笑ひければ、愚公きゝて、わが代よりこぼちをめて、わが子の代にも繼ぎてこぼち、わが孫の代にも、又その子の代にも

あなかしがましく

秋の野になまめきたる女郎花あなかしがまし花もひと時、古今俳諧歌、僧正遍昭

列子

八篇あり、鄭の列禦寇の著。愚公の事は其の湯問篇に出づ。

寓言
他事に託して
暗に事實をほ
のめかしたる
説話。

繼ぎてこぼちなば、終にはわきへ移さぬ事やあるべきといへば、いよく笑ひけりごなんしるしおける。もごより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世に愚なりといへば、愚公ご名づけ、智叟がいふやうなる事は、世に智なりといへば、智叟ご名づけたるならし。およそ天下の事、愚公の心ならば、おそくごも一度は成就すべし。然るに世に智ありご稱する程の人は、大かた智叟が心にて、愚公が山を移すやうの事を聞きては、その愚を笑ふほごに、何事もその功を成就せぬなるべし。然れば世のいはゆる愚は、反つて智なり。世のいはゆる智は、反つて愚なり。それゆるに、禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。今、翁も百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人より見ては、翁が迂闊なることを笑はるべし。されご老い僻めるにやあらん、この志を守りて身を終へなんごこを思ひ侍れ、愚公が山を移すたぐひなるべし。(卷二)

二 老僧が接木

忍が岡
今の上野公園。

寛永
約三〇〇年前
後水尾、明正
兩帝の時の年
號。
將軍家
三代將軍家光。
谷中
今の東京市下
谷區。
みづはぐむ
かいまる
やんごとな
さ
尊貴。

忍が岡のあなた谷中のさごに、何がしの院さて、ひごつの眞言寺あり。翁いごけなかりし頃、其の住僧をしりてしばしば寺に行きつ、木の實ひろひなごして遊びしが、住僧かたへの人にもかひて、前住の時の事をなん語りしをき、侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にてこ、やかしご御過ぎがてに御覽ましましてけるが、此の寺へもおもほえず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧は、や八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつ、手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、お側に二人三人つき奉りしを、中々やんごごなき御事をば思ひよらねば、そのま、背き居たりしを、坊主なに事するぞ。ご仰せられしを、老

僧心にあやしとおもひて、いとはしたなく、接木するよ。と御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧が年にて、今、接木したりとも、其の木の大きになるまでの命も知れがたし。それにさやうに心をつくす事の不用なるぞ。と上意ありしかば、老僧、御身は誰人なれば、かく心なきことをきこゆるものかな。よくおもうて見給へ。今、此の木もつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもうてする事なり。あながちに我一代に限るべき事は、こ言ひしをきこしめして、老僧が申すこそ實にもこさわりなれ。と御



徳川家光

正學
朱子學をいふ。

死しても骨
朽らじ
魯先大夫臧文仲其身没矣其言立於後世此之謂死而不朽。國語

北條
後北條氏、北條早雲の後。

感ありけり。その程に御供の人々おひく、來りつゝ、御紋の御物ごも多くつごひしかば、老僧それに心得て大きに恐れて、奥へ逃入りしを御めし出しありて、物など賜りけるごなん。
いま翁も、此の老僧が接木するごこく、老いくちぬれごも、あるかざりは舊學をきはめて、人にもつたへ書にもものこして、後世にいたりて、正學のひらくるはしにもなり、此の道のために萬一のたすけごもなりなば、翁死してもなほいけるがごこし。古人のいはゆる「死しても骨くちじ。」といひしこそおもひあたりはべれ。いさゝか我が身のために謀るにあらず。諸君も翁がこのこゝろを信じたまへかし。(一卷)

三 天徳寺琵琶を聴く

相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺、豪健の勇將なりしが、ある時

佐野 下野國安蘇郡
佐野町の北唐
澤山に城あり
き

天徳寺 佐野房綱、初
め修理大夫と
稱して、後藤
伯といふ。兵
法に通じ、棺
善くす。慶長
六年、約三二
〇年前。歿。年
四十四。

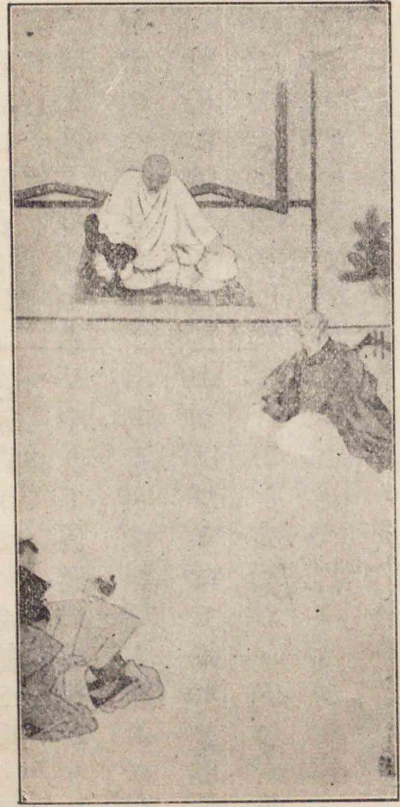
平家 平家物語。

琵琶法師を招いて平家を語らせて聞きけるに、いまだ語らぬさきに琵琶法師にいひけるは、某はたゞあはれなる事を聞きたくこそあれ、其の意を得て語り候へ。といへば、法師、心得候。さて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺あはれがりて雨雫と泣きける。「さて今一曲前のごとくあはれなる事を聞きたし。」といへば、那須與一宗高が扇の的を語りけるに、平家なかばより天徳寺また落涙數行に及べり。

後日に家臣の輩に、過ぎし日の平家はいかゞ聞きつる。といふに、家臣ども、尤もおもしろき事にて候。但し我等一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに勇烈なる事にて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候ふにや。今に不審なる事にいづれも申し合ひ候。といへば、天徳寺驚きて、只今までは各、をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にてさて

蒲冠者 源範賴。
梶原 源太景季。

ノ、力を落して候。先づ佐々木が先陣を合點して見られ候へ。頼朝舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生暖いけづかを高綱に賜へるにあらずや。されば、其の甲斐もなく、此の馬にて宇治川を先陣せずして人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、



天徳寺琵琶を聴く

其の志を察して見られよ、あはれならぬ事かは。さて、しばし涙を拭ひつつ暫くありていひけるは、又那須與一も、大勢の中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗入れて的に向ふに至

鳴をしづめて
物音を立てざること。

迷惑
困却の意。

萩吹く風も
あさぼらけ萩の上葉の露見ればはやはだ寒し秋のはつ風(新古今、曾根好忠)

る迄、源平兩家鳴をしづめて是を見物するにもし射損じなば、身方の名折たるべし、馬上にて腹搔切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ、武士の道程あはれなる者は候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやりて落涙に堪へざりき。然るに各には、あはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は、只一旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ。こいひしかば諸臣皆迷惑して辭なかりきとなり。(卷二)

四 月は世々の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、萩吹くかぜも身にしむころなり。久しく翁のがり行かねば、此のほごの

李白
支那唐代の大詩人、字は太白、青蓮と號す。この詩「把酒問月」と題す。
飛鏡
月のこと。
丹闕
天上の仙宮。
白兔搗藥
世俗の説に、月中兔ありて藥を搗くといふ。
姮娥
月中にありといふ仙女。

老のねざめも覺束なし。いざたづね問はんこて、ある夕暮に例の人々打ちつれて來しが、又もまゐらんこて歸らんこせしを、翁こめて、今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らん。しひてこまり給へ。こいへば、翁の心をいかでそむくべき。さあらば、こて、各座をしめて清談の露やうく、繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、さかな取りそへて盃出しけり。諸客皆醉ひて興に入るこぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、青天有月來幾時。我今停盃一問之。と李白が詩を高らかに打吟じけるを、又ふたり脇よりつけて、人攀明月不可得。月行却與人相隨。さうたふ。又外の人々迭に唱和して其の次を、皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。こ謠ふ。又其の次を、但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白兔搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰鄰。こ謠ふ。其の次よりは翁も助言して、今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆

玉山倒る
醉ひて倒れる
こと。

如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。さうたひをさめけり。
其の後數獻に及びて、玉山倒る、

大方は
大かたは月を
もめでじこれ
ぞこのつもれ
ば人の老とな
るもの、(平
在原業平)

老の心も
ながむるにも
の思ふことの
慰むは月は浮
世のほかより
やゆく(拾遺
大江爲基)



かひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくつく、と見

ばかりに見えけり。

雲
さて翁いふやう、大かたは月を
もめでじ、とはよみたれども、老の
心も月みるにぞなぐさみ侍る。

間
されどそれにつきて、千載無窮の
感もおこりぬれば、うべ月を人の
老となるごもいふべかめり。但
し月を見るにいろ／＼あり。今

思ひ出し侍る。童子の時、家にて
八月十五夜の宴に、ひとり隅にむ

舌をくひけ
り
笑ふことの甚
しきをいふ。

て、月は徑いく尺かあるべき。各考へて見給へ。といふ。また同じ
やうの人かたへより、あれは物の切口と見ゆ。奥へ長さいかほご
かあらん。さて、互に僉議しけるを、きく人々、皆舌をくひけり。翁も
をさな心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して、光のあかき
をほこり、影の清きにめでて、良夜とてたゞ打寄り物喰ひ酒のみな
ごして、歌ひののしるを樂とするは、かの寸尺を語るにひこしかり
ぬべし。又騷人墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を雕り句ごとに
錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其もたゞ景氣の上を翫ぶばか
りにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。

翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人を慕ひて、其の書をよみ其
の心をしりつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人
を照し來て、今にあれば、古人の形見ごもいふべし。されば月に對
して昔を偲びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月は

ものいはねども、語るやうにもおぼえ忘れてはむかしの事をこはまほしくも思ふぞかし。

今李白が詩、月の景氣をすてて、一氣に古今を洞觀して、青天有月來幾時、^ソいひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。むかしより李杜とて、杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。然れども李白が詩も、古今流水の如きを感じるまでにて、後代を待つ心の心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、往者余弗及。來者吾不聞、^カいふに至りて、屈子が心をおしはかりつつ感にたへずなんおぼえき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語らうてごおもへご、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我ご心を同じうすらめごおもへご、其の人をきかねば誰ごか知らんごぞ。是なん屈子に

杜甫
支那唐代の大詩人、字は子美、少陵と號す。

楚辭

楚の屈原の辭賦とその弟子宋玉等の作を斷めたるもの。

屈子

屈原のこと。楚の懷王に仕へしが讒言によつて流さる。

限らず、古今心あるきはは、大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いごご感ふかく覺ゆるなり。もごより今は末の世の昔なれば、いづれの代にか又わがごごく月に對して今を偲ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましごおもひ侍る。そのこゝろを、

月見れば末の代までも偲ばれて

見ぬいにしへのいごごゆかしき

こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず。(卷五)

五 進 學

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學

少壯不努力
梁の沈約の長
歌行。

陶淵明
名は潛、晋の
詩人。
朱文公
朱熹、宋の大
儒、文公と諡
す。

に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。若し悠悠として日を涉りなば、一旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、
少壯不努力。老大徒傷悲。
といひ、陶淵明も、
盛年不重來。一日難再晨。及時當勉勵。歲月不待人。
といへば、古人も此の感懷を同じうすごぞ見ゆる。此等の詩句、時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、
勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

陶侃
晋人、陶淵明
の曾祖父。

曩祖
先祖。陶侃を
指す。

言簡にして意も明白なり。折節打誦じて自ら警むるによかるべし。それよりも余が常に愛誦するは陶侃が語なり。
大禹、聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢。生無益於時、死無聞於後、是自棄也。



陶 といへるこそ學者志を
淵 立つる法とすべきなれ。
明 前にいへる淵明が詩も、
曩祖以來の家法にこそ
と思はる。凡そ人と生
れて學に志ありといふきは、の生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果てんは、いと口惜しかるべきことなり。されば諸君も此の陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉

壬子 享保十七年、壬子、鳩巢時に年七十五歳。

せらるべし。(卷五)

六 壬子試筆

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黄金の術成りがたし。されば犬馬のよはひ是まであるべしとも思はざりしが、いつしか老の波より来て、こころは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまつさへ近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生を學ぶこにはあらねども、此の三こそ春の園を窺ふ事も叶はねば、閨の中ながら梢につたふ鶯の音に殘の夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔を偲ぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より、學びの窓に年を経たる甲斐ありて、程朱の道にしたがひて、鄒魯の風をたづね、韓歐が文をこのみて、邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべき。さ

董生 漢の董仲舒。

程朱 宋の程明道、程伊川、朱子。

鄒魯の風 鄒は孟子の生國、魯は孔子の生國。韓歐、唐の韓愈、宋の歐陽修。

三綱 君臣、父子、夫婦。
五常 仁義禮智信。

ても多くの年月を経て、世の移りかはる有様を考ふるに、盛衰榮枯、互に行きかふをば、夢とやいはん現とやいはん。誠に、富貴は浮べる雲のごとく、禍福は糾へる繩のごとし。といへるが違ふ事あるべき。中に只吾が聖人の樹て給へる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりは、かはることあるべからず、人として仰ぎ崇ぶべきは此の道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人々義理にうごく、利欲にさこくなるほごに、五常の道廢れて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もこよりいやしき身にて、一代の風教を維持せんことも、わが力に及ぶべきにあらねば、ひこへに蚍蜉の樹を撼かし、精衛が海を填むに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも、吾が儒、分内の事なれば、是を度外に置くべきにも非ず。いかなれば世に老師宿儒と稱する人の、好んで異説を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそ

わが身一つ
は
月やあらぬ春
や昔の春なら
ぬわが身一つ
はもと身一つ
して(在原業
平)

にするぞ。たゞ務めて新奇を競うて、俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる阿世曲學とは是等をいふなるべし。よし人はさもあらばあれ、縦ひ風俗は昔にあらざるなりぬとも、わが身ひとつはもこのごごく仁義の道を守りつゝ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりしるしごもいふべけれ。然るにあら玉の春の初て、人は皆己が志、身の福を、萬代といはふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらず目出たきものは此の道なりとて、かくなん筆をこゝろむるならし。(五卷)

太平記抄

太平記に就いて

萩野由之

萩野由之
佐渡の人、國
史家、文學博
士、大正十三
四年、年六十

太平記ほど世に不可思議なる書はあるまじきなり。名づけて太平記と云ふからには、時津風枝を鳴らさぬ御世のあらましを記せるかと思れば、さにはあらで、花園天皇の文保二年に筆をおこし、後村上天皇の正平二十二年にとちめたり。其の間約五十年は、所謂南北朝時代と稱する酣戰の亂世なり。この書名は、洞院公定日記、難太平記などに見えたれば、古より太平記と呼びなせるに、別に安危由來記、國家治亂記、國家太平記など云ふ名もありといへど、據る所明かならず。いづれにもせよ、亂世を記して太平の記と云ふ、御世を祝ぎたるか、諷せるか、抑、亂世を刺れるか、先づ不可思議の一なるべし。

此の書、何時の頃、如何なる材料によりて、如何なる人の書き残しけんこと、諸説ありて確かならず。何の巻より何の巻までは玄惠の作なりとか、又は小島法師の作なりとか、學者の考へし所もあれど、今は皆確かに知り難し。今の世ならば、其の來歴に於て、既に出版業者も引受けまじき代物ならん。然るに著作の當時、出版術も未だ開け

ざりし時代より、既に上は王侯より下は士民の卑しきに至るまで、上下一般に賞翫せられ、應安の昔天下に翫ぶ太平記といはれてより、今に長く天下の愛讀書たり。名も知れぬ人の手に成りて、かく永劫の名譽を博す、これ不可思議の二つなり。

太平記の著者は、足利尊氏が篠村八幡の願文を評して「文章玉を綴りて詞明かに理濃かなれば、神も定めて納受し御坐すらん」といへり。願文は蓋し著者の潤色を経たるものなれば、太平記作者の自賛と云ふも可なるべし。かく潤色を加へて、天下に愛翫せらるゝほどの書は、その弊として、小説と一般多くは世道人心に益なく、何等の效果をも遺さざるべきに、太平記は然らず。文章の妙もさることながら、又世道人心に裨益せしこと莫大なり。不可思議なることの三つなり。

太平記世に出でて後五百年天下の人心を動かしたる力は偉大なり。殊に徳川幕府の末にありて、所謂勤王の志士を鼓舞し、七百年來の武家政治を、二十年の一刹那に亡ぼし、世を建武中興の昔に返し、又神武創業の古に復せり。これ亦太平記の感化なり。太平記なかつせば、南朝回顧の思想起らず、南朝回顧の思想なかつせば、いかで王政復古の大業成らんや。卑賤無名の手に成りて五百年後に社會改造の原動力となる。げに難太平記に所謂官方深重の作者が勤王心凝結の力ならんか。これ亦不可思議の四つなり。

菅政友

元史料編纂官

久米邦武

文學博士、早稲田大學教授

近世太平記の史實を疑ふものありて、今に學者の議論絶えず。先年菅政友氏の「太平記の謬妄遺漏多き事を辯ず」と云へる論、久米邦武氏の「太平記は史學に益なし」といへる論出でてより、稗史小説の類と見做され、史學家の取るべからざるもの如く云はれしが、近頃は又太平記の記事を肯定すべき多くの文書出でて、疑を挿むべき餘地なしと喜べる學者も少からず。一褒一貶學界は走馬燈の如く變遷せり。よしや誤多き記録とは云へ、この書なかつせば、如何なる古文書學者も、何によりて文保正平五十年史の考證を成すことを得べけん。如何なる史家も、何によりて時運の推移を観察する智識を得らるべき。要するに南北朝史の智識は、この書によりて扶植せられしものなり。然るに或時は無益の書と云はれ、或時は杜撰と云はれ、又或時は貴重書と云はる。而して太平記の光輝は、學者の褒貶に蔽はれずして常に赫灼たり。これ不可思議の五つならずや。

太平記は、かく過去現在に於て不可思議なる書なり、將來に於ても亦不可思議の功力あるは知るべきのみ。そは之を能く讀む人の自ら覺る所ならん。」

一 落花の雪

俊基朝臣
藤原氏、種範の子。

先年
後醍醐天皇の正中元年。

土岐十郎頼貞
美濃の人、俊基朝臣等と謀り、北條氏を滅ぼさんとせり。

七月十一日
後醍醐天皇、元弘元年（約六〇〇年前）

落花の雪

またや見ん交野のみの櫻
春花の雪ちる春のあけぼの。
藤原俊成（新古今）

交野

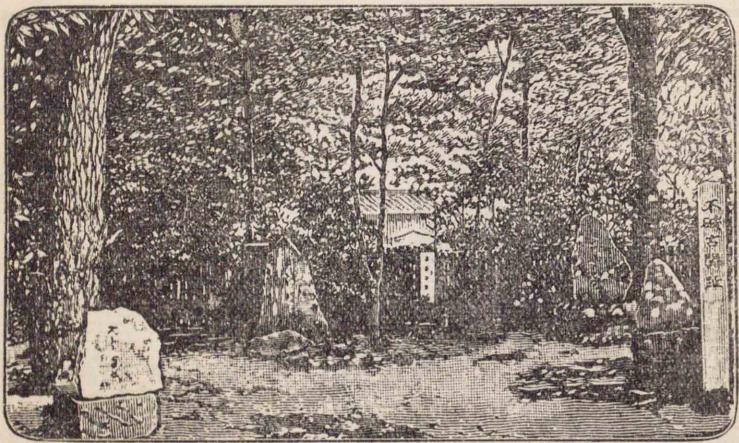
大阪府北河内郡、淀川の畔。
紅葉の錦

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられたりけるが、又今度の白状ごもに、専ら隠謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ儲けてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほごだにも、旅寝ごなればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りご顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心のうちぞあはれなる。

憂きをば留めぬ逢坂の關の清水

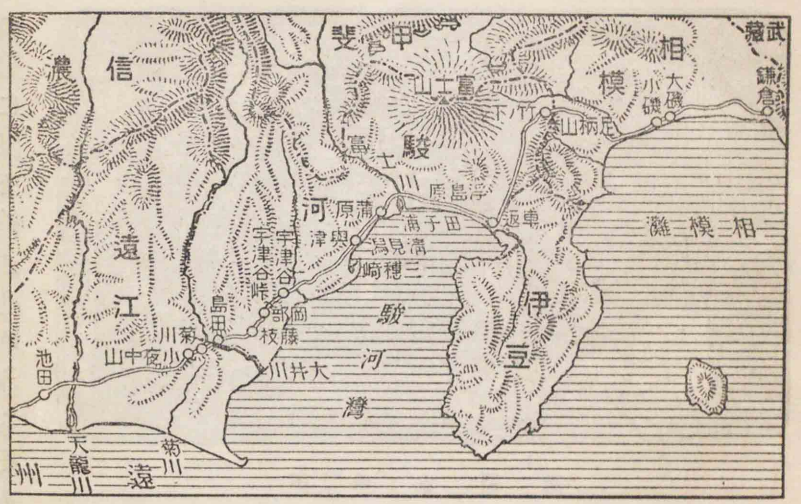
に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み、駒もごごろご踏みならず、瀬多の長橋打渡り、行きかふ人に、近江路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかごあはれなり。時雨もいたくもる山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありごても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば、夜の間にも、



不 破 古 關 趾

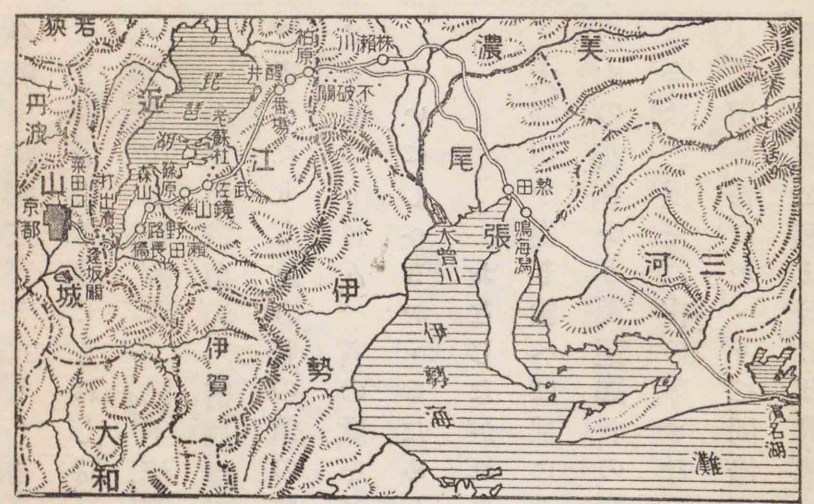
朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦を衣てかへる。藤原俊成（新古今）
打出の濱
大津市の松本、石場邊の古名。
うねの野に
近江より朝たちくればうねの野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は、御歌、大歌所
時雨もいたくもる
白露も時雨もいたく守山は下葉のこらず色づきにけり。（古今、紀貫之）
篠原・鏡の山
滋賀縣野洲郡。鏡山いざちよりて見たり。行かん年へぬる身は老いやしぬるとい（古今、大伴黒主）

不破の關屋
は 人住まぬ不破の關屋の板びさしあれにしあとはたけし秋の風(新古今、藤原貞經)潮干に さまよ千鳥、聲こそ近く鳴海濁傾く月にしほやみつらん。(新古今、藤原季能)



老蘇の森の下草に、駒をこぎめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。番馬醒が井柏原不破の關屋は荒れ果てて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、潮干に今や鳴海濁傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟沈み果てぬる身にしあれば、たれかあはれと夕暮の、いりあひなれば、今はとて、池田の宿につきたまふ。

命なりけり
年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中(新古今)



旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そこも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけり。と詠じつつ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれる。隙行く駒の足はやみ、日、已に、亭午に上れば、餉進らす程とて、輿を庭前に昇き止む。轅を叩きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の

光親卿
藤原光親、承
久に院宣書き
たる人、但し、
菊川にて四句
を書きしは、
中納言藤原
行なり。

龜山殿
京都府葛野郡
離宮にありし
離宮。

合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、
昔南陽縣、菊水、汲下流而延齡。
今東海道、菊河、宿西岸而終命。
と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は、わが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。
いにしへもかゝるためしをきく川の
おなじながれに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は、二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。
島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、鳶楓いとしげりて道もなし。昔業平の中

夢にも人に
駿河なるうつ
つもの山邊のう
つにも、夢に
も人にあはぬ
なりけり、伊
勢物語

上なきおも
ひ
富士の嶺の煙
はなほも立ち
のぼる上なき
ものはおもひ
なりけり、新
古今、藤原家
隆

七月二十六
日
元弘元年。



菊川の宿

將の住所をもこむこて、東の方に下りしに、夢にも人に逢はぬなりけり。詠みたりしも、かくやこ思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や浅き舟浮けて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ足柄山の巔より、大磯小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐこしもはなけれど、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそつきたまひけれ。(卷二)

笠置

京都府相樂郡

類火云々

この事、元弘元年九月二十八日なり。

主上

後醍醐天皇。

藤原

藤原宣房の子。建武中興の後、建武中興の世に死す。

季房

藤原の弟。北條氏の爲に下野に流され、配所に死す。

十善

不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不擘貪、不瞋恚、不邪見。

赤坂

河内國南河内郡。正成ここにあり。

二 笠置山

さる程に、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々、卿相雲客皆歩跳なる體にて、いづくをさすともなく、足にまかせて落ち行き給ふ。この人々、はじめ一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく、道闊くして、敵の関の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別々になりて、後にはたゞ、藤原季房二人より外は、主上の御手を援きまゐらす人もなし。忝くも、十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そこも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして、夜の内に赤坂の城へ、御心ばかりを盡されけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道

多賀の郷
京都府綴喜郡
有王山
多賀村と井田村との間にそびゆ



笠置山附近圖

の傍なる青塚の陰に、御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅縠の御袖をほしあへず。さかうして、夜晝三日に、山城の多賀の郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。藤原季房も、三日まで、口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せむ方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共、うつゝの夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るか、聞き召して、樹蔭に立ち寄せ給ひたれば、下露の、はら／＼と御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより

あめが下にはかくれがもなし

藤房卿、涙をおさへて、

いかにせんたのむ蔭にて立ちよれば

なほ袖ぬらすまつのしたつゆ

山城の國の住人、深須入道、松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峰々残る所なく、搜しける間、皇居かくれなく尋ねいだされさせ給ふ。主上、誠に怖しげなる御氣色にて、汝等、心ある者ならば、天恩を戴きて私の榮華を期せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道、俄かに心がはりして、あはれ、この君を隠し奉りて、義兵を擧げばや。と思ひけれども、後に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成りがたからむことを憚りても、だしけるこそうたてけれ。(卷三)

深須
異本、三栖とあり。

うたて
情なく。

三 赤坂の奇計

赤坂

大阪府南河内郡松屋村の南

かの赤坂の城と申すは、東一方こそ山田の畔重々に高く、少し難所のやうなれ、三方は皆平地に續きたるを、堀一重に堀一重塗つたれば、如何なる鬼神が籠りたりとも、何程のここかあるべきと、寄手皆これを侮り、また寄るこひこしく、堀の中、切岸の下まで攻めつきて、逆茂木を引きのけて打つて入らんこしけれども、城中には音もせず。これは如何様、昨日のごとく手負を多く射出でて、漂ふ所へ後攻の勢を出だして、揉み合はせんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分けて後の山へさし向けて、残る二十萬騎、稻麻竹葦の如く城を取巻きてぞ攻めたてける。かゝりけれども、城の中よりは矢の一筋をも射出せず、更に人ありとも見えざりければ、寄手愈、氣に乗つて、四方の堀に手をかけ、同時に上り越えんとしけるところを、もこ

昨日のごとく

東軍が第一戦に射伏せられ引退きて休息する處を伏せ起りて大敗せること。
稻麻竹葦 數多き葦。

より塀を二重に塗つて、外の塀をば切つて落すやうに拵へたりければ、城の中より四方の塀の釣繩を一度に切つて落したりける間、塀に取りつきたる寄手千餘人、壓しに打たれたるやうにて、目ばかりはたらくところを、大木大石を投げかけ、打ちける間、寄手又今日の軍にも七百餘人討たれけり。

東國の勢ども兩日の合戦に手ごりをして、今は城を攻めんとする者一人もなし。只その近邊に陣々を取りて、遠攻にこそしたりけれ。四五日が程はかやうにてありけるが、餘りに晏然として守り居たるもいふかひなし。『方四町にだに足らぬ平城に、敵四五百人籠つたるを、東八箇國の勢どもが攻めかねて、遠攻したる事のあさましさよ。』なんど後までも人に笑はれんこころ口惜しけれ。前々は逸りのまゝ、楯をもつかず、攻具足をも支度せで攻められたればこそ、そゝろに人は損じつれ。今度はたてを變へて攻むべし。』と

平城 ひらじろ、平地に築きたる城

攻具足 楯の類

持楯 置楯に對して、いふ、各自に持ち進む楯
いため革 革を膠の水に浸し、鐵槌もてうちかためしもの

天邊 かぶとの頂
綿上 わたがみ
鐵の肩のところに、革にて作れり。

て、面々に持楯をはがせ、その面にいため革を當て、輒く打たれぬやうに拵へて、かづきつれてぞ攻めたりける。切岸の高さ、堀の深さ、幾程もなければ、走りかゝつて塀に附かんこころはいさやすく覚えられども、これもまた釣塀にてやあらんこころ危みて、さうなく塀には附かず、皆堀の中におり漬つて、熊手を懸けて、塀を引きける間、已に引破られぬべう見えけるところに、城の中より、柄の一二丈長き柄杓に、熱湯の沸きかへりたるを汲んでかけたりける間、冑の天邊、綿上のはづれより、熱湯身に通つて、焼け爛れければ、寄手恠へかねて、楯も熊手も打棄て、ばつと引きける見苦しき。矢庭に死ぬるまでこそなけれども、或は手足を焼かれて立ちあがらず、或は五體を損じて病み臥すもの二三百人に及べり。寄手たてを變へて攻むれば、城中工を變へて防ぎける間、今はともかくもすべき様なくして、たゞ食攻にすべしとぞ議せられける。かゝりし後はひた

櫓をかき
「かき」は設けの意。

すら軍をやめて、おのが陣々に櫓をかき、逆茂木を引きて、遠攻にこそしたりけれ。これにこそなかく、城中の兵慰む方もなく、氣も疲れぬる心地してけれ。(卷三)

四 備後三郎高德

その頃備前國に兒島備後三郎高德といふものあり。主上笠置に御座ありし時、御方に參じて義兵を擧げしが、事いまだ成らざるさきに、笠置も落され、楠も自害したりと聞えしかば、力を失ひてもだしけるが、主上隱岐國へ遷されさせたまふと聞きて、二心なき一族どもを集めて評定しけるは、「志士仁人無求、生以害仁、有殺身以成仁」といへり。されば、昔衛の懿公が北狄のために殺されてありしを見て、その臣に弘演といひし者これを見るに忍びず、自ら腹をかき切つて、懿公が肝を己が胸の中に納めて、先君の恩を死後に報

主上
後醍醐天皇。

懿公が肝
韓詩外傳に見ゆ。

義を見て
「見」義不爲無勇也。(論語)

船坂山
兵庫縣赤穂郡。

今宿
姫路の西一里ばかりのところに。今の高岡村の中。

杉坂
佐用郡江川村より美作に越す峠。

三石
岡山縣和氣郡。岡山の東二十五里。今鐵路に沿ふ。

院の庄
津山町の西一里半。

いて失せたり。義を見てせざるは勇なきなり。いざや臨幸の路次に參りあひ、君を奪ひ取り奉りて、大軍を起したとひ屍を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へん」と申しければ、心ある一族ども皆この議に同ず。さらば路次の難所に相待ちて、その隙を窺ふべしとて、備前と播磨との境なる船坂山の巔に隠れ伏し、今や〜とぞ待ちたりける。

臨幸あまりに遅かりければ、人を走らかしてこれを見するに、警固の武士山陽道を経ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らん」とて、三石の山よりすぢ違に、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂へ着きたりければ、主上はや院の庄へ入らせ給ひぬと申しける間、力なく、これよりちり〜になりけるが、せめてもこの所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潜

四 備後三郎高德



兒島高徳(菊池容齋筆)

行して時分を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に大きな櫻の木ありけるをおし削りて、大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫^シ空^ク勾^ク踐^ナ

時^ニ非^ズ無^キ范^シ蠡^モ

勾踐
越王
范蠡
勾踐の臣

御警固の武士ども朝にこれを見つけて、何事をいかなる者が書きたるやらんこて、讀みかねて、乃ち上聞に達してけり。主上はやがて詩の心を御さとりありて、龍顔ここに御快く笑ませ候へども、武士どもはあへてその來歴を知らず、思ひ答むることもなかりけり。(四卷)



——(筆幽探野狩) 別訣の井櫻——

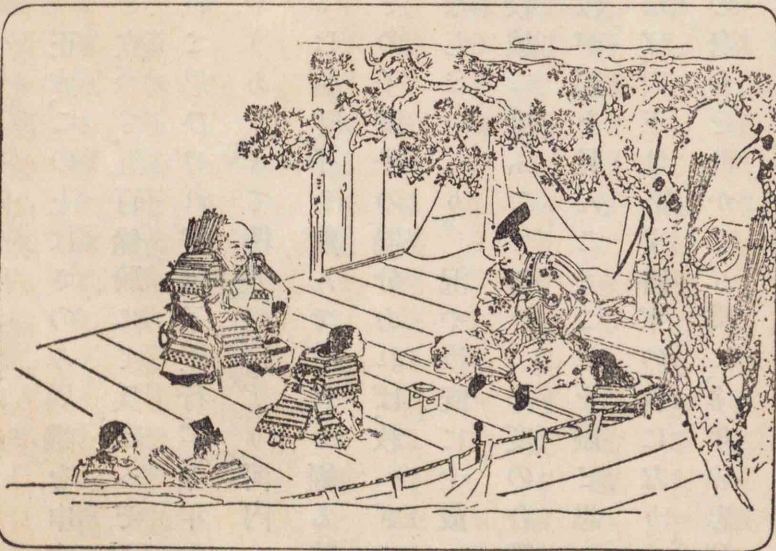
五 櫻井の訣別

大勢を率し
延元元年尊氏兄弟西國の軍を率して東上す。
 兵庫に引退
此の時まで義貞は播磨國加古川の西の岡に陣しむたり。
 主上
後醍醐天皇。
 山門
比叡山延暦寺
 川尻
淀川の川尻。

尊氏卿直義朝臣大勢を率して上洛の間、要害の地において防ぎ戦はんために、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬をまゐらせて内裏に奏聞ありければ、主上大いに御騒ありて、楠木判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力をあはせて、合戦を致すべし。と仰せられければ、正成畏つて奏しけるは、尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛し候なれば、定めて勢は雲霞のごとくにぞ候らん。身方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗つたる大勢に懸けあはせて、尋常の如くに合戦を致し候はば、身方決定うち負け候ひぬ。ご覚え候なれば、新田殿をも京都へ召され候ひて、前のごとく山門へ臨幸なり候べし。正成も河内へまかり下り候ひて、畿内の勢を以て川尻をさし塞ぎ、兩方より京都を攻めて兵糧を疲らかし候ほ

清忠
參議藤原清忠
 節度使
新田義貞
 一年の内に
建武三年(延元元年)正月
尊氏東國の兵
を率ゐて入京
し、車駕延曆
寺に幸せられ
 たり
 去年
建武二年
 東八箇國
關東八ヶ國

ごならば、敵は次第に疲れておち下り、身方は日々に隨ひて馳せ集まり候べし。その時に當つて、新田殿は山門よりおし寄せられ、正成は搦手にて攻めのぼり候はば、朝敵を一戦に滅すことありぬと覺え候。新田殿も定めてこの料簡候とも、路次にて一軍もせざらんは、無下にいひがひなく人の思はんずるところを恥ぢて、兵庫に支へられたりご覺え候。合戦はこてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よくく、遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。ご申しければ、誠に軍旅の事は兵に讓られよ。ご諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されるは、正成が申すところもそのいはれありごいへごも、征伐のためにさし下されたる節度使、未だ戦をなさざる前に帝都を捨て、一年の内に二度まで山門に臨幸ならん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふごころなり。たごひ尊氏筑紫勢を率して上洛すごも、去年東八箇國を従へて上



(筆湖風本松) 別 訣 子 父 公 楠

りし時の勢にはよも過ぎじ。およそ戦の始より、敵軍敗北の時に至るまで、身方小勢なりごいへごも、毎度大敵を攻め靡けずごいふ事なし。これ全く武略の勝れたるところにはあらず、たご聖運の天にかなへる故なり。然ればたご戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さむ事、何の仔細か有るべきなれば、たご時をかへず楠罷り下

五月十六日
延元元年。

櫻井

大阪府三島郡
島本村にあり
山崎街道の一
驛。

將軍
足利尊氏。

るべし。ごぞ仰せ出されける。
正成、この上はさのみ異議を申すに及ばずして、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成これを最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありて、櫻井の宿より河内へ返し遣はすこて、庭訓を遺しけるは、獅子子を産んで三日を経る時、數千丈の石壁よりこれを投ぐ。その子獅子の機分あれば、教へざるに中よりはね返りて、死する事なしといへり。況や汝既に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、わが教誡に違ふこと勿れ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、これを限と思ふなり。正成既に討死すこと聞きなば、天下は必ず將軍の世になりぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に残つてあらん程は、金剛山の邊

養由

周末の人、柳葉をよくし、射を去る百歩、之を射て百發百中せりといふ。

紀信

漢高祖の忠臣。高祖、楚の爲に荊を圍まれし時、紀信、高祖に代りて死せしむ。重圍を脱せしむ。

昔の百里奚云々

史記に、秦の穆公、百里奚の子孟明視と蹇叔とを將とせしに、百里奚と蹇叔とを里奚と蹇叔とを載すし。

にひきこもつて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。泣く泣く申し含めて、各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公晉國を伐ちし時、軍の利なからんことを鑑みて、その將孟明視に向つて今を限の別を悲しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づくに聞きしより、國必ず滅びんことを愁へて、その子正行を留めて、なき跡までの義を進む。彼は異國の良弼、これは我が朝の忠臣、時千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、あり難かりし賢佐なり。(卷十六)

六 正成兄弟討死

楠木判官正成、舍弟帶刀正季に向ひて申しけるは、敵前後を遮つて味方は陣を隔てたり。今は遁れぬ處と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵を一散らし追ひまくつて、後なる敵に戦はん。と申しけれ

左馬頭
足利直義。

ば、正季然るべく覺え候。同じて、七百餘騎を前後に立てて、大勢の中へぞ駆入りける。

須磨の上野
須磨寺の上野山。
蓮池
兵庫縣武庫郡長田の西大字池田にあり。

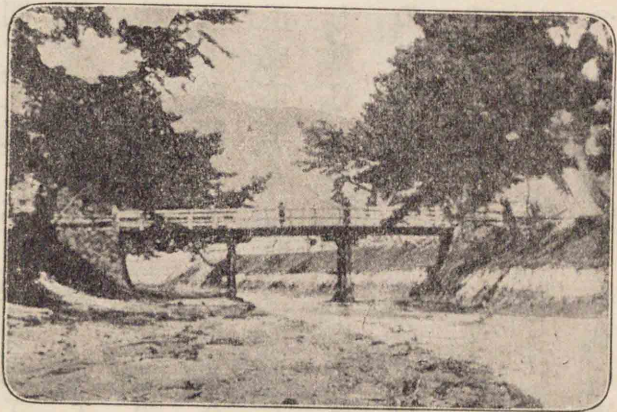
左馬頭の兵ども菊水の旗を見て、よき敵なりと思ひければ、取籠めてこれを討たんとしけれども、正成正季東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、よき敵と見るをば馳せ並べて組んで落ちては首を取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つてかけ散らす。正成と正季と七度合ひて七度分る。其の心偏に左馬頭に近づき組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠木が七百餘騎にかけ靡けられて、また須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、矢尻を蹄に踏立てて右の足を引きける間、楠木が勢に追つめられて已に討たれ給ひぬと見えける處に、薬師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にて返し合せて、馬より飛んでおり、二尺五寸の小長刀の石つきを取延べて、懸る敵の馬の平頸むながい

將軍
足利尊氏。

の引廻し切つては、勿ね倒しく、七八騎が程切つて落しける。其の間に、直義は馬を乗替へて遙々落延び給ひけり。

左馬頭楠木に追ひたてられて引退くを將軍見給ひて、新手を入替へて、直義討たすな。と下知せられければ、吉良石堂高上杉の人々、六十餘騎にて湊川の東へ駆出でて、跡を切らんとぞ取巻きける。正成正季また取つて返して此の勢にかゝり、懸けては打違へて死し、懸け入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで闘ひけるに、其の勢次第々に滅びて、後は纔かに七十三騎にぞなりにける。此の勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠木京を出でしよ、世の中の事今はこれ迄と思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、氣已に疲れければ、湊川の北に當つて在家の一村ありける中に走り入つて、腹を切らん爲に鎧を脱ぎて我が身を見るに、斬疵十一箇所までぞ負ひたりける。此の外七十二人の者共も、皆五箇所

九界
迷悟兩界の十
界の中佛界を
除きしもの
地獄・餓鬼・畜
生・修羅・人
間・天上・聲
聞・緣覺・菩薩



淡川の古戰場

三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠木が一族十三人、手の者六十四人、六間の客殿に二行に並みゐて、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、「抑、最後の一念に依つて善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なる。」と問ひければ、正季からく、「こ打笑つて、七生まで只同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやこそ存じ候へ。」と申しければ、正成世に嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、われもかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、此の本懷を達せん。」と契つて、兄弟共に刺違へて、同じ枕

肥前守
菊池武重。武
重・武吉・武
光、皆武時
の子。

元弘
元弘元年後醍
醐天皇登置に
幸して正成を
召さる。

聖主
後醍醐天皇。
逆臣
尊氏。

に臥しにけり。橋本八郎正員、佐美河内守正安、神宮寺太郎兵衛正師、和田五郎正隆を始として、宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十餘人、思ひ／＼に並みゐて一度に腹をぞ切つたりける。菊池七郎武吉は兄の肥前守が使にて須磨口の合戦の體を見に來りけるが、正成が腹を切る所へ行合つて、「おめ／＼しく見捨ててはいかゞ歸るべき。」と思ひけるにや、同じく自害をして枕をあはせて臥しにけり。抑、元弘以來忝くも君に憑まれ奉つて、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。然れども此の亂不慮に又出で來て後、仁を知らぬ者は朝恩を捨てて敵に屬し、勇なき者は苟も死を免れんとして刑戮にあひ、智なきものは時の變を辨せずして道に違ふことのみ多かるに、智仁勇の三徳を兼ねて死を善道に守り、功を天朝に施すこと、古より今に至るまで、この正成ほどの者は未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひ、逆臣横しまに威を振ふべき其の

前表なれさて、有智の人は竊かに眉をぞひそめける。(卷十六)

七 梅檀は二葉より

楠木が首
正成戦死し一
旦は其首を六
條河原に懸け
たりしが尊氏
之を正成の家
郷に送る。

判官
楠木判官正成

帶刀
正行。

尊氏卿楠木が首を召されて、朝家私日、久しく相馴れし舊好の程も不便なり跡の妻子ども今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。さて、遺跡へ送られける情の程こそ有難けれ。楠木が後室子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、様々申し置きし事ごも多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしさて、正行を留め置きしかば、出でしを限の別なりとは、かねてより思ひ儲けたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じてかはりはてたる首を見るに、悲みの心胸に満ちて、歎の泪せきあへず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母が歎のせん方もなげなる様を見て、流るゝ泪を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、即ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を右の手に抜き持つて、袴の腰をおしさげて、自害をせんごぞし居たりける。母急ぎ走り寄つて正行が小腕に取りついて、泪を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳しさいへり。汝幼くとも父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。をさな心にもよく、事の様を思つて見よかし。故判官が兵庫へ向はれし時、汝を櫻井の宿より還し留めし事は、全く跡を弔はん爲にあらず、腹を切れさて、残し置きしにもあらず。「我たごひ運命盡きて戦場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死残りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅ぼして、君を御代にも立てまゐらせよ。」と云ひ置きし所なり。其の遺言具さに聞きてわれにも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひまゐらせん事あるべ

梅檀
梅檀は二葉より
薫じ梅花は
蜜めるに香あり。
(撰集抄)

るを、母怪しく思ひて、即ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を右の手に抜き持つて、袴の腰をおしさげて、自害をせんごぞし居たりける。母急ぎ走り寄つて正行が小腕に取りついて、泪を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳しさいへり。汝幼くとも父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。をさな心にもよく、事の様を思つて見よかし。故判官が兵庫へ向はれし時、汝を櫻井の宿より還し留めし事は、全く跡を弔はん爲にあらず、腹を切れさて、残し置きしにもあらず。「我たごひ運命盡きて戦場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死残りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅ぼして、君を御代にも立てまゐらせよ。」と云ひ置きし所なり。其の遺言具さに聞きてわれにも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひまゐらせん事あるべ

禮盤 佛前正面の高座。勤式の時導師この上にのぼりて佛を禮拜す。

將軍 尊氏。

主上

後醍醐天皇。

醫王善逝

藥師如來。

耆婆

印度古代の名醫。

扁鵲

支那古代の名醫。

忠雲僧正

中院光忠の子。

しこも覺えず。泣く泣く諫め止めて、抜いたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。其の後よりは、正行、父の遺言、母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、或時は童どもを打倒し、頭をこる眞似をして、これは朝敵の首をこるなり。云ひ、或時は竹馬に鞭を當てて、これは將軍を追懸け奉る。んご云ひて、はかなき手ずさみに至るまでも、只此の事をのみ業とせる心の中こそ恐ろしけれ。(卷十六)

八 主上崩御

延元三年八月九日より、主上御不豫の御事ありけるが、次第に重らせたまふ。醫王善逝の誓約も祈るにその驗なく、耆婆扁鵲が靈藥を施すにその驗おはしまさず。玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見えさせたまひければ、大塔の忠雲僧正、御枕に近づきた

神路山

伊勢神宮の後方に續く山。

石清水

石清水八幡宮。

三明

聖者の有する三種の明智。過去、現在、未來の三つに通達すること。

三界

一切衆生の生死輪廻する世界。即ち欲界、色界、無色界。

妻子珍寶

大集經十四、虚空設菩薩品に出づ。

三良

秦の穆公の卒せし時、殉死せし子車氏の三子、奄息、仲行、鍼虎、皆良臣なり。

始皇帝云々

始皇帝を驪山に葬る時、奇器珍寶を悉く家中に埋む。

てまつりて、涙を押へて申されけるは、神路山の花再び開く春を待ち、石清水の流つひに澄むべき時あらば、さりとも佛神三寶も捨てまゐらせらるゝ、ここはよも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈既に變らせたまひて候よし、典藥頭驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に赴かせたまふべき御事をのみ思し召しさだめられ候べし。さても最後の一念によりて、三界に生を引くご經文に説かれて候へば、萬歳の後の御事、よろづ叡慮にかゝり候はんことをば悉く仰せ置かれ候うて、後生善所の望をのみ、御心にかけられ候べし。と申されたりければ、主上くるしげなる御息を吐かせたまひて、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、これ如來の金言にして、平生朕が心にありしことなれば、秦の穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へしこと、一も朕が心に取らず。たゞ生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉く亡ぼして、四海を泰平ならしめんこ

有待の身
凡夫無常の身。

傳奏
天皇又は上皇へ庶事を傳達奏聞する聯主上

南殿
後村上天皇。紫宸殿。

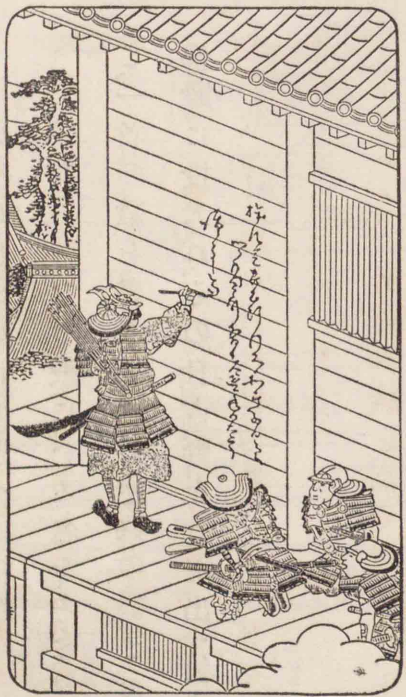
兩度の戦

正平二年八月、藤井寺に細川顯氏を破り、同十二月阿部野に山名時氏を破る。

に落つべく覺え候。有待の身思ふにまかせぬならひにて、病に侵され、早世仕るこゝ候ひなば、たゞ君の御ためには不忠の臣となり、父のためには不孝の子となるべきにて候間、今度師直師泰に驅け合はせ、身命をつくし合戦仕つて、かれが頭を正行が手に懸けて取り候か、正行正時が首を彼等に取りられ候か、その二つのうちに、戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らんために、參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ここに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵、今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下

の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とする所なれば、今度の合戦、手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見



小楠公の辭世

て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せいだされければ、正行頭を地につけて、ごかくの勅答に及ばず、たゞこれを最

西河
一本に「西阿」とあり。

後の參内なりと思ひ定めて退出す。正行正時和田新發意舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠將監西河子息關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束し

先皇
 後醍醐天皇。
 如意輪堂
 後醍醐天皇塔
 尾御殿の少し
 下なる山腹に
 あり其本堂は
 同天皇の御影
 殿なり。

たりける兵百四十三人先皇の御廟に参つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

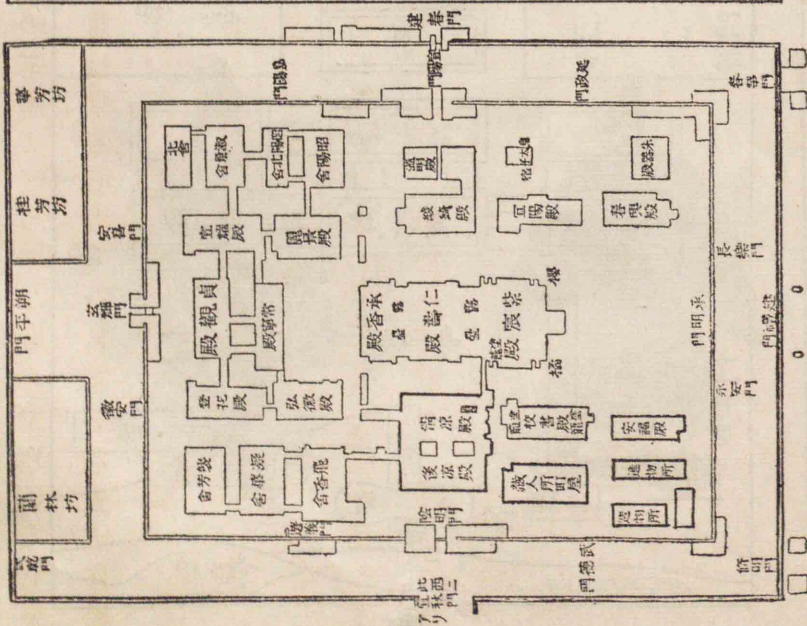
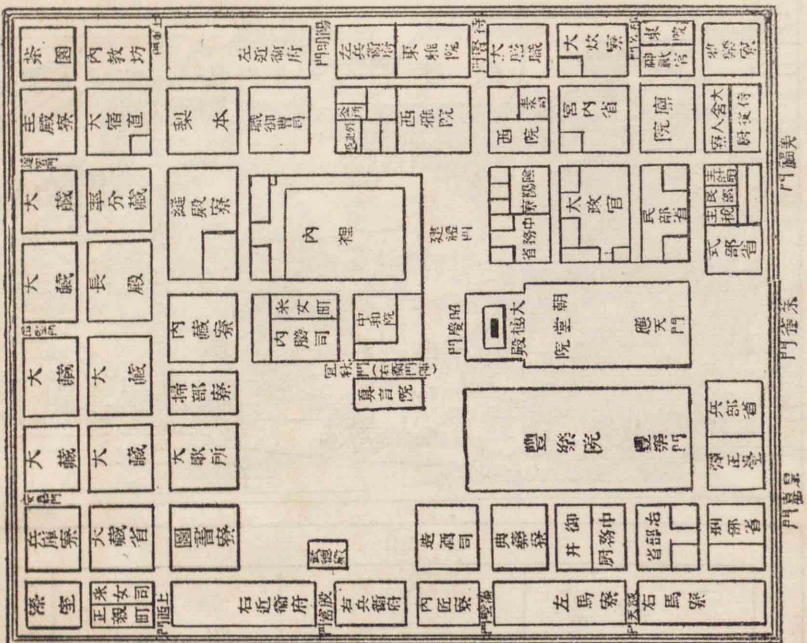
かへらじこかねて思へば梓弓

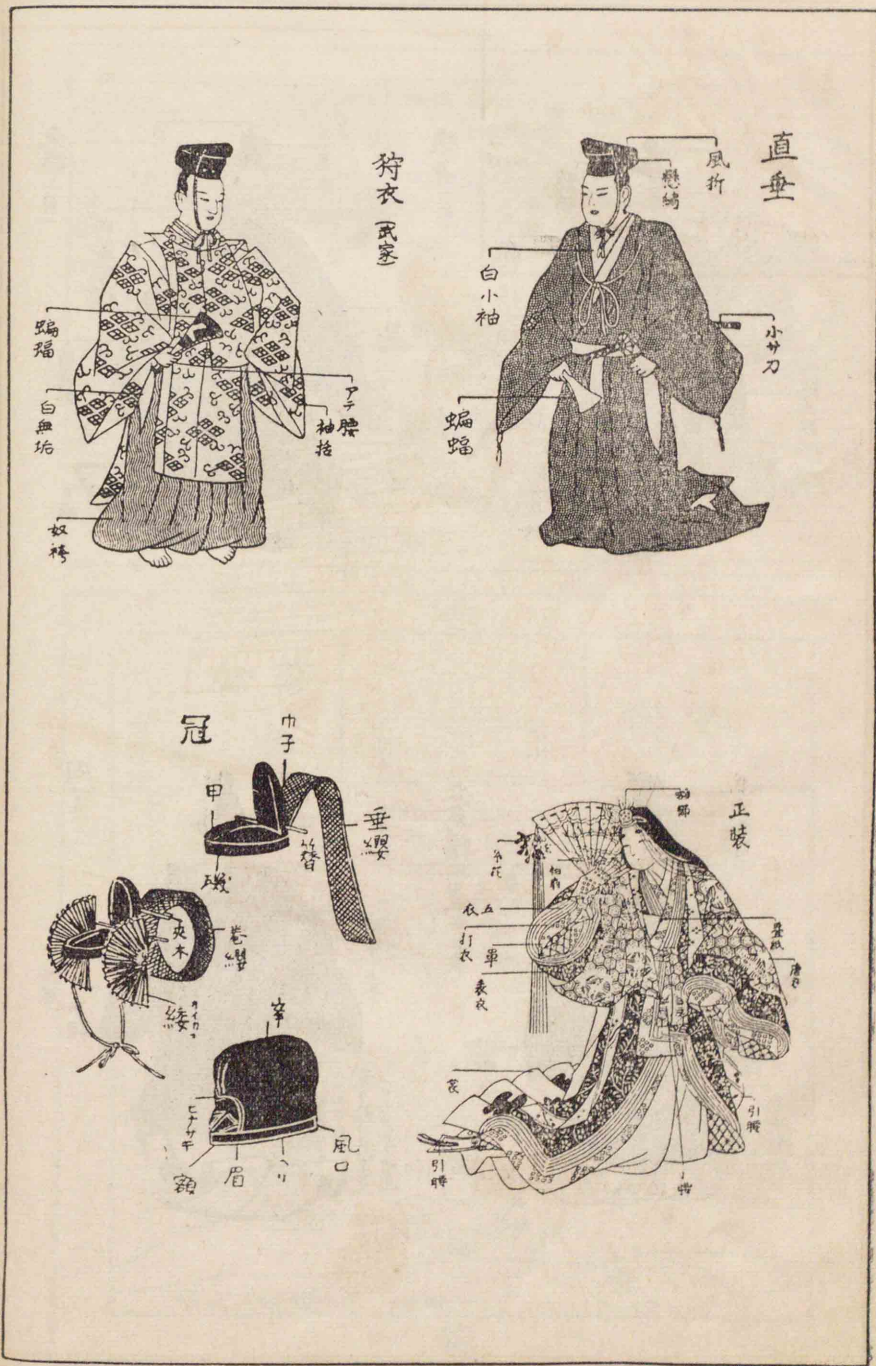
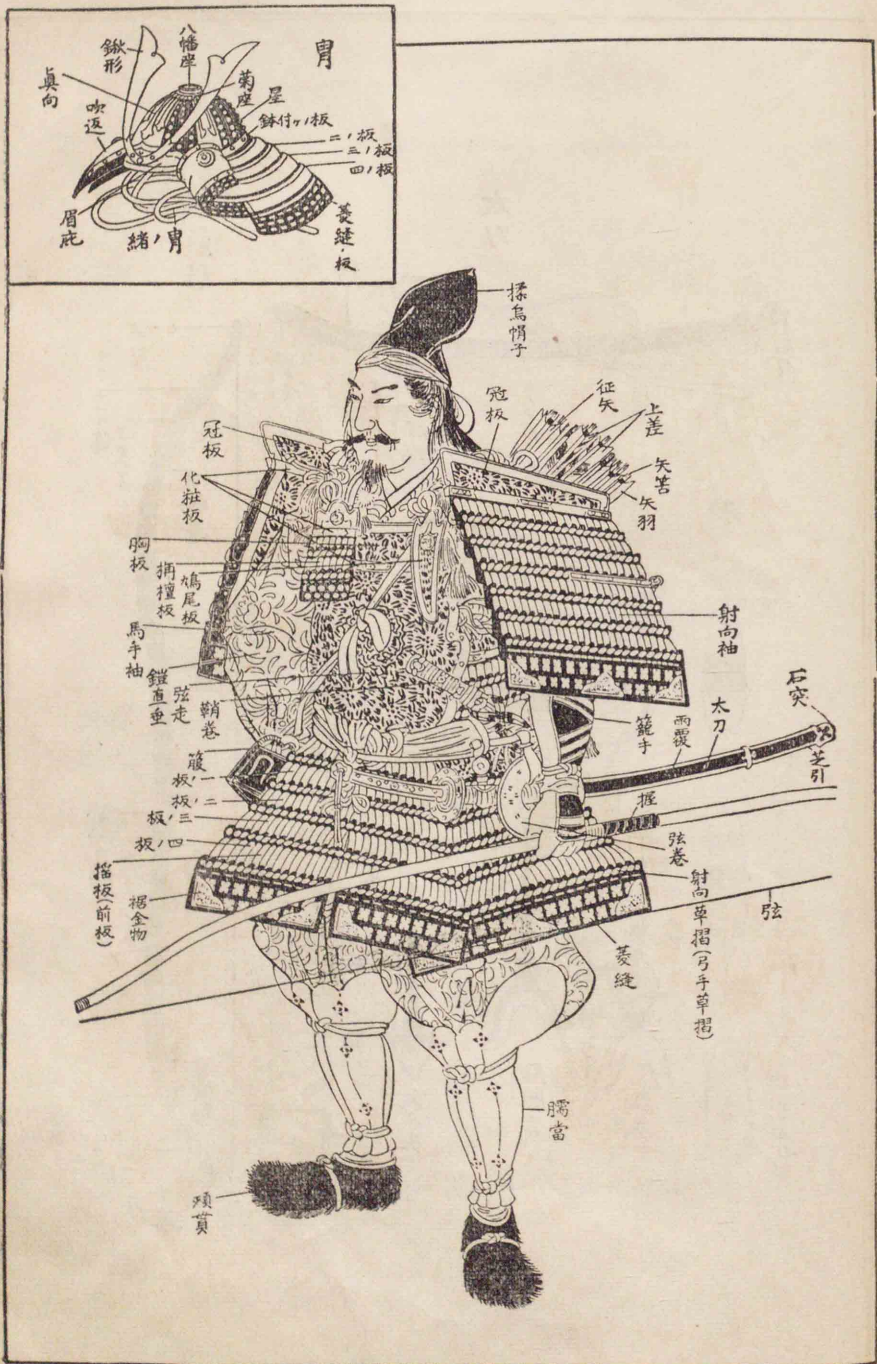
なき數に在る名をぞこむる

こ、一首の歌を書きこむめ、逆修の爲とおぼしくて、各、鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へぞ向ひける。

(卷二十六)

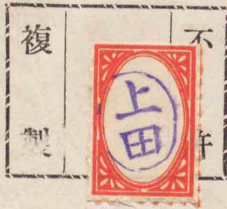
國語讀本 卷五終





日五廿月三年四和
 濟定檢省部文
 用科語國校學中

大正十三年十二月十六日印刷
 大正十四年二月十九日發行
 大正十四年二月廿四日訂正再版印刷
 昭和三年十一月一日訂正再版印刷
 昭和三年十一月四日訂正再版發行
 昭和四年三月十七日訂正再版發行
 昭和五年二月十八日改訂六版發行



發行所

編者 上田 萬年
 同 榮田 猛猪
 同 鹽野 新次郎
 印刷者 株式會社 成
 印刷所 東京市芝浦區二丁目三番
 東京市京橋區加賀町一番地
 株式會社 成

電話銀座(57)二四九四番
 番東京一〇五五番

昭和五年改訂版
 國語讀本

卷數	定價	昭和五年臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十七錢
四、五、六、八	各金四十六錢	金七十五錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十三錢
四	金四十四錢	金七十二錢

昭和五年改訂版
 國語讀本
 七拾參

